
ブラッディ・ドール

伊川侑子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブラッディ・ドール

【Nコード】

N8432T

【作者名】

伊川侑子

【あらすじ】

ドローシャ王国のスラム街に住む駆け出しの魔女ネネは、ゲテモノ好きで常に無表情な変わった女の子。そんな彼女がスラムの有名な不良・ルーカスに恋をして・・・？

ネネの奇天烈な愛の奔走記とそれに振り回される（可哀そうな）人々を描いたダークでコミカルな恋愛ファンタジー（下ネタ・グロ多数注意）

1話 一目惚れと愛の告白（前書き）

本作品はヤンキーな魔女の続編っぽい内容となります。
単発で読んでも問題ありません。

1話 一目惚れと愛の告白

ぐつぐつ煮えたぎる紫色の液体をかき混ぜている少女は、隣の部屋で土下座をしている男と師匠の会話を聞きながら沸き出る泡をばーっと見つめていた。

「お願いします！

魔女様の薬が無ければ息子が死んでしまいます！」

「そんなはした金で売るような薬はないよ」

帰りな、としやがれた声で無慈悲に言う老婆。

すっぽりと身体を覆う黒いローブ、フードの下から覗く長い鉤鼻。

その出で立ちは魔女そのものだ。

男は諦めることなく、床に頭を擦りつけて頼み込んだ。

「私の持っている財産なら全て差し上げます！！ですから――

――」

ほう、と老婆は目を光らせる。

「ならばお前の臓器で手を打ってやろうか」

「ぞ……臓器……」

目を見開きながら震える男は、声をひっくり返しながら呟く。
息子の命と自分の臓器を頭の中で天秤にかけているのだらうと、少女は無感情に思いながら火にかけていた鍋を覗く。

良い頃合いだ。

満足気にこくりと頷き、瓶に詰めてある目玉を鍋の中に放り込んだ。途端にムワツと緑色の煙が沸き起こり、少女の居る部屋の方に視線を寄こした老婆が呆れたように首を横に振る。

「ネネ、目玉を入れるでないと何度言ったらわかるんだ」

ネネと呼ばれた少女は無表情のまま空になった瓶に視線を落とした。ふわふわのウェーブがかかった水色の長い髪、琥珀を薄めたような黄土色のトロンとした瞳。肌の白さも相まって、全体的に色素の薄い彼女の名前はネネ。若く駆け出しの魔女である。

師匠の元に弟子入りしてから早8年経つが、ネネの特殊な性格の所為か、彼女の魔女としての実力には非常に偏りがあつた。

「・・・だって目玉好きなんだもの」

――間違つた方向に。

一連の会話を聞いて混乱した男は真っ青になりながら手を合わせる。

「お、お、お助けください！どうか神のご慈悲を！」

「神頼みするくらいならさっさと臓器を渡すんだね」

「しかし……！」

「イヤならとつと帰んな」

おら、と足で蹴りながら男を家の外に追い出した老婆。

紫からだんだん緑に変ってきた液体の様子を見て、ネネはクフツと分かるか分からないくらいの小さな笑みを漏らした。

ドローシャ王国のスラム街、そこにネネと師匠は2人で暮らしていた。

魔女としてかなりの稼ぎがあるにも関わらず、ネネの師匠はあえて小さくボロい小屋に好んで住みついている。

ネネも最初は治安が悪く不潔なスラム街を嫌ったが、住み慣れれば

どうってことはなかった。何より国に干渉されないこの地を、今では出るのが惜しいと思っっているくらいだ。

とは言っても、あくまでここはスラム街。

弱肉強食の世界で勝負に負ける弱い人々に未来はない。

道端に立つのは胸元を大きく開いたドレスを着た娼婦。少し路地裏に入れば転がっている死体。痩せ細って物乞いしている子どもたちも多い。

四季を知らせる緑は少なく、道端を歩く人々の目は濁り切っている。そういう場所なのだ、ここは。

ネネは籠いっぱい野菜を持ち、今日の夕飯はビーフシチューにしようと思いきや、足取り軽く帰路についていた。しかし道の向こう側からこちらへやって来る男の姿に、彼女はパタパタと足を止める。

赤銅色の綺麗な髪に血を連想させる深い赤の瞳。

彼を見た瞬間ネネは手に持った籠を落としてしまったが、彼女の瞳は男に釘付けになったまま。

ころころと足元を転がる野菜には一気に人が集って盗まれてしまった。

けれどもそんなことはどうでもよかった。

今のネネの世界には自分と赤銅色の髪の男しかいないのだから。

しかしジロジロと見られていた男は、不機嫌に眉をしかめてネネを片手で突き飛ばす。

「見てんじゃねえよ」

尻もちをついた痛みよりも突き飛ばされた方がショッキングだった。

——いい意味で。

彼の取り巻きの一人の男がネネを見て焦り出す。

「あ！頭、コイツ・・・いやこの方は魔女のネネ様ですよ！
暴力ふるっちゃまずいですって！」

「知るか」

手下の助言を一蹴した彼はネネに目もくれず去って行った。

ネネは走って自宅へ帰り、乱暴にドアを開けて部屋の中に飛び込む。
珍しく機敏に動くネネを不審に思った老婆は問うた。

「どうしたんだい、ネネ。

何かあったのかい」

「う・・・運命の出会い・・・なんて・・・」

ネネは空っぽの鍋に目玉やトカゲを適当にぶち込みながら、鼻歌を
歌わんばかりのご機嫌っぷりで呟くように言う。

「血・・・もらえないかな。

骨でも・・・爪でもいい。

本当は目玉がいいんだけど・・・あんな瞳にずっと見つめられたら
私・・・」

ぐりぐりと鍋を高速で掻き混ぜながらキャツと頬を染めるネネとは対照的に老婆は悲鳴を上げた。

「鍋！それ以上は爆発するーっ！！」

その日、魔女の家の天井が吹き飛んだ。

赤銅色の髪の男、ルーカス・ブラッドは廃墟の中で数人の手下と共に潜伏していた。

左腕に走る生々しい傷は彼が堅気の人間ではない証拠。

「頭！ロドス組がやられた！
移動した方が・・・！」

廃墟に駆け込んできた手下は焦ったように言うが、ルークは大きなイスに座ったまま静かに否定する。

「今焦って動けば奴らに居場所がばれる、落ち着け」

「でも・・・」

まだ何か言い足りないのか、今度は別の手下が言いにくそうに口を開いた。

「どうした？」

「それが・・・客人が・・・」

困惑した表情で手下がゆっくりと顔を向けた方には、場にそぐわない水色のふわふわした髪の子。

彼女は男だらけのこの場で物怖じすることなく、無表情のまま歩みを進める。

ルークにはその子見覚えがあった。

先日道ですれ違ったときに突き飛ばした魔女だ。

「ふん、仕返しにでもしてきたのか？上等じゃねえか」

「・・・違います」

女の子は人形のようにどこか作りものめいた雰囲気を持っている。肌の色は白を通り越して透明に近いのでは、と思うほど。

ルークは彼女が自分を訪ねてきた理由を探ろうと、目を細めて観察

したが全く感情が読み取れない。それほどに無表情で温度のない女の子だった。

「何しに来た」

「私はネネ、です・・・」

自分のボスを守るべく手下たちは、水色の髪の子、もといネネを武器を持って囲んだ。

しかし彼らの顔は一樣にして険しい。それは彼女が“魔女”であることを知っているから。

「もう一度問う、何しに来た」

「あなたに会いに来ました。ルーカス・ブラッドさん」

「要件は」

「会いたかったから会いに来た・・・それだけですよ」

ネネが一瞬だけ笑ったかもしれない。しかし表情の変化は注視していないと分からないほど僅かなものであった。

ルークは射殺するような鋭い視線を向けて殺気立つ。手下たちも手に汗をかきながらも剣や槍を握りしめる。

「俺に何の用だ」

「あなたに・・・お願いがあります」

ネネは服の中から短剣を取り出し、切っ先をルークに向けた。

宣戦布告、そう受け取ったルークは常人なら泣いて逃げ出すほどの殺気でネネを睨んだが、やはり彼女の表情に変化はない。

武器を取り出したというのに全く動かない手下たちに怒るルーク。

「おい、なにやってんだ、殺せ」

「いやいやいや！！ダメですって！！」

「魔女を傷つけたら死罪ですよ、死罪！！」

それくらいの常識はルークだって知っている。

つたく、と役に立たない手下に毒づき、再びネネに視線を戻した。

「そんなに俺を殺したいなら魔術で殺せばいいじゃないか」

「殺すなんて・・・そんな・・・私の身にあまる光栄です・・・」

私はただ、あなたに私の子供を産んで欲しいだけで・・・」

手下は一斉にずっこけた。

「あ、間違えました。」

あなたの子供を産みたいだけで・・・」

「間違えすぎだろ！」

誰かのヤジともとれる突っ込みが飛ぶ。

ネネは無表情のままポツと顔を赤らめた。表情に変化はないのに照れているのが分かり、ルークは頬の筋肉をヒクヒクと引きつらせる。

「冗談に付き合うつもりはない。出て行け」

「冗談だなんて・・・本気です」

「おい、誰かこいつを摘まみ出せ！」

ルークの命令に顔を見合わせる手下たち。

魔女は世界でもここドローシャにしか存在しない貴重な存在。さらには神の子とも言われ、傷つけるだけで国庫に手を出すのと等しい犯罪として扱われる。つまり死罪なのだ。

本来ならスラム街に居ていいような人ではない。

とうとう手下の一人が根を上げた。

「無理っすよお。魔女って魔術使うんでしょう？」

「どうするよ、蛙に姿を変えられたら」

「お、おそろしい・・・」

「情けない」

大の大人の男がたった一人の小娘も摘まみ出せないとは。ルークは苛立ちながら血のような赤い瞳でネネを睨んだ。

「お前と関わるつもりはない」

「ネネです」

「お前と関わるつもりはない」

ネネの言葉を見殺して同じ言葉を繰り返す。そこには微塵も迷いはなかった。

ルークにとってネネは鬱陶しい存在、ただそれだけ。

「結婚してください」

「お断りだ」

「遠慮せずに……」

「嫌だと言っている」

「じゃあ恋人になってください」

「剣を突き出しながら言う台詞か！」

とうとう痺れを切らしたルークは立ち上がって叫んだ。
彼の言う通り台詞と行動が噛み合っていない。

ルークと手下たちは頭を抱えてどうしたものかと困惑する。

「そもそもなんで俺なんだ」

「あなたが好きだからです」

「だったらもつとマシなやり方を考える！」

「じゃあやり方を変えたら恋人になつてくれますか？」

ネネは少し考えた後、再び服の中から何かを取り出した。
ルークたちは嫌な予感しかない。

ネネがはい、と差し出したのは赤い液体がいっぱいに入った小瓶だ。

「私が作ったマムシとタランチュラの血入り、特製トカゲ酒です。
主に・・・夜系のお薬です」

「いるかつ！！！」

反射的にルークはそれを叩き落とした。

「頭あ、俺怖いつす・・・」

「俺も・・・」

泣く子も黙る不良の男が泣きそうな顔をしている。

割れた小瓶から漏れた赤い液体は、じゅわじゅわと煙を立てながら
床に広がり水溜まりを作っていた。

「他を当たれ、俺には無理だ」

真面目に心の底から言い切ったルーク。無論本音である。

「嫌です・・・、あなたじゃないと嫌。」

ネネも本気だ。再び剣の切先をルークに向けた。

「俺のどこがいいのか知らないが無理だ」

「・・・恋人になってくれるまで離れませんから。」

お風呂に入るのもトイレに行くのも付いて行きますから・・・」

もはや告白を通り越して脅迫である。剣を取り出した時点でそうではあったが。

何を言っても絶対に引かないだろうと悟ったルークはドスンツとイスに腰を下して明後日の方を向いた。

どうやったらネネを諦めさせることができるのであろうか・・・と。

2話 まずは形式から

ネネは宣言通りルークの傍を離れなかった。
立ち上がり歩きだしたルークは、後ろからついて来るネネに足を止めて恨めしそうに見遣る。

「本当にトイレまでついて来る気か」

「あ、大丈夫です、慣れてますから・・・」

「何にだ！」

このままでは本当について来そうだ。中まで。
ルークは唇を噛んで苦々しげな声を出す。

「本気でついて来るならここで斬り殺す」

「恋人になってくれるんですか」

「聞こえなかったのか、斬り殺すと言ってるんだ」

殺すという言葉さえもネネには愛の言葉にしか聞こえない。

ルークを例えるなら獰猛な肉食獣だろう。
彼の纏う気配は他人を決して寄せ付けない。そして一度牙を向けばその恐ろしさを思い知る前に命を落とす。

鍛え上げられた肉体も、鋭い瞳も、全ては獲物を狩るためのもの。

彼の醸し出す色気を讃えながらネネは呑気にそんなことを考えているうちに、ルークはさっさとどこかへ消えて行ってしまった。

ぽつんと残されたネネの後姿がどこか寂しげで、2人のやり取りを見守っていた手下たちがつつい慰めの言葉をかける。

「あ、あの、魔女さん、頭は気が短いから・・・」

「そうそう、あまり気にするものじゃないぞ」

あはあはと必死に笑顔を作る手下一同。

しかしネネの表情をよく見れば頬が赤く染まっていた。殺すと言われて喜んでいたらしい、何故か。

言葉を失って遠い目をする手下たちに、ネネは振り返って無表情のまま問う。

「ルーク様に女がいるの？」

「いや、いないとは思っけど・・・」

「おいバカ！何正直に話してるんだよ！」

ここで恋人がいると知れば諦めてくれるかもしれないのに、と。しかしネネはフリフリと小さく首を横に振る。

「・・・いいのよ。」

その方が・・・手の打ちようがあるし・・・」

どんなだ、と一同は心の中で突っ込んだ。

「何をしている・・・その女は？」

新しい人物が廃墟に現れ、一斉に彼を見た後に軽く頭を下げる。
彼らの行動からそれなりの地位の人物だと分かるが、ネネは直観的にルークと同じくただ者ならぬ気配を感じていた。

黒い髪に細くつり気味の目、鷹のような深い黒茶の瞳がギロリとネネの姿を捕える。

「お前は・・・荒廃の魔女の弟子だな」

「・・・あなたは」

「名乗る義務などない。

お前には関係のない場所だ、ただちにここを去れ」

「嫌・・・」

何があっても離れないと、無表情ながらに決意が満ち溢れていた。
彼は険しい顔をしてネネを睨みつける。

「魔女ともあろう者が何に執着している」

「ルーク様」

「ルーク様？」

彼に何の用が？」

「……好きだから」

黒髪の男は少しだけ眉間のしわを緩めた。
しかし次の瞬間には先ほどよりさらに険しい顔をして、ネネの白く細い手首を掴んだ。

「……余計ダメだ」

そのまま腰に腕を回してネネは俵担ぎされたまま外に追い出される。
地面に下してもらえず無言で彼は歩き続け、着いた先はネネの家だった。

「もう2度と関わるな」

「……」

ネネは何も言わずに見つめるのは去って行く男の後ろ姿。彼女は諦めたのか、踵を返して自分の家の扉を開けた。
ガラスの瓶に薬を詰めている師匠がネネの帰りを迎える。

「おや、追い返されたのかい」

「……」

ネネは返事をせず扉を閉め、部屋の端っこにちよこんと座った。
表情も行動も人間らしくないネネは、まさに人形さながら。しかしそんな彼女にも心はあるのだ。好きな人に拒絶されて嬉しいないわけがない。

老婆はククツと喉を鳴らして笑う。

「お前が取り乱すなど珍しいではないか、なあネネ」

「そう・・・かな」

「そうであろう?」

「師匠・・・自分がどうすればいいかわからないときって、どうすればいいの・・・?」

老婆は手を止めて床をぼんやりと見ているネネの方を向いた。

「どうもこうも、相手が悪すぎるだろう。」

本来なら魔女は王に嫁ぐ身だというのに・・・」

身分もお金もない男に懸想するなど、と老婆は呆れたように言っ
て続ける。

「ネネ、忘れてはいけないよ。スラムの勢力に手を出してはならん。
我々はあくまでも国に謀反を企む連中を監視する役目を賜った、監
視者。」

内情に首を突っ込んではいかんだ」

「無理」

「もうちよつと考えようか!」

即答したネネにクワツと口を大きく開く老婆。

しかしネネに全く反省している様子はなく、ますます心配は積もっ
ていく。

老婆はゴホンツと咳をして、仕切り直しだと優しく語った。

「ネネ、わたしはもう古い先短い。」

おそらくあと10年生きられればいい方だ」

神の恩恵を受けるドローシャでは寿命が1万年。25歳で見た目は止まり、寿命を迎える何十年前に老いが始まる。

師匠も老いが始まった時点で寿命を迎えるだろうことは一目瞭然だった。

街では同じ若さの人間で溢れかえっており、ネネのような若い子や老婆は珍しい。

老婆は瓶の蓋を締め、今までの自分の人生を振り返って感慨深げに言う。

「約1万年、長い人生だ。そのほとんどをスラムの監視者として生きてきた。」

わたしの死後は弟子であるお前が次代の監視者となるのだぞ」

「嫌だ」

「もう少し考えようか！」

「・・・まったくこの子は、マイペース過ぎて敵わないよ」

またもや即答したネネ。

老婆は手に負えないと頭を抱えてかぶりを振った。

ドローシャは神の恩恵を受けており、総じて非常に豊かな国である。神が王を選び国を治めているが、このスラムだけは例外であった。元々スラム街とは治安が悪く貧困層の多い地を指すが、ドローシャのスラム街は自ら民が築きあげた無法地帯と言っていいだろう。歴史を遡れば、ドラック中毒者・違法入国者・その他の事情を抱えた者たちが集まり、国の干渉を受けぬように街の周りに高い壁を設けた。

兵士がいないこの地は何もかも自由である代わりに、自分の身を守ってもらえる組織は存在しない。そういう約束のもとでスラム街は継続されてきた。

ここでは勢力がいくつかのグループを形成し、抗争がひっきりなしに起こっている。

その勢力は大きく分けて3つ。

ひとつは大男ノロゾイの率いるグループ。
もうひとつはロドス率いるグループ。
そしてルークの率いるグループである。

要するに、ルークは自由の地ドローシャのスラムで猿山のボス的位置にいる人物なのだった。

「いいか、これからはノロゾイ組の縄張りであるB地区を捕りにいく」

黒髪に釣り目の男、ジェルダは数百の手下の前で高らかに言い放つ。ルークはジェルダの隣に座り込み、静かに聞き入る手下の様子を伺っていた。

「ノロゾイは鼻が利く、油断するな。」

各自武器の用意を、C地区の裏通りからB地区に流れ込む。

決戦は明後日の夜明けと同時にだ」

いいな、とジェルダの問いに拳を上げて叫ぶ手下たち。

同じく無言で拳を突き上げる——ネネ。

「なんでお前がここにいるんだ！」

ちよこん、とさりげなくルークの横に座っているネネに、ジェルダは細めの目を見開いて大声を出した。

彼女は悪びれる様子もなく、無表情ながらご満悦の様子でルークの肩に頭を寄せる。すぐにルークが横に移動したため、身体のバランスを崩したネネは倒れこんでしまったが……。

「誰かコレを摘まみ出せ」

ルークは低い声で唸るように言った。

ジェルダがすぐにネネの首の根っこを掴み持ち上げる。

黒茶の瞳と琥珀の瞳がお互いの顔を映し、互いに睨み合う。

「関わるなと言っただはずだ」

「・・・嫌」

「諦めろ」

「・・・嫌」

「今は大切な時期なんだ。お前の戯れに付き合っている暇はない。抗争に巻き込まれて死にたいのか？」

「・・・」

とうとう顔を反らして無視したネネ。

ジェルダの額には見事な青筋が浮かび、ルークは機嫌が悪いらしく舌打ちをした。

「ジェルダ、ソレにもう構うな、計画に支障が出る」

「しかし・・・」

ドカッ！！と重たい音を立て、ジェルダの身体は一瞬で吹っ飛んだ。

—— ルークが蹴り飛ばしたからだ。

ネネの頭上を通って地面に叩きつけられたジェルダはごろごろと転がり、蹴りを受けた腹を抱えて蹲る。
息を飲む手下たち。

「誰が俺に口応えしていいと言った」

視線だけで人を殺せそうなほど獰猛なルークは例え仲間であろうと自分に逆らう者には容赦がない。

従わぬ者は去れ。それがルーク組のルールであり全てであった。

ジェルダはゴホゴホと苦しそうに咳込んでいる。

恐れをなして震える手下とは対照的に、キラキラと瞳を輝かせてルークを見つめるネネ。彼の動きも言葉も彼女にとっては全てがカッコイイらしい。

「おい」

ルークに声をかけられたネネはふと我に返ってルークを見つめ直す。

「俺の周りをうろつくのはやめろ、目障りだ。

お前みたいなガキに興味はない」

ネネはガキだと言われ反射的に自分の胸に手を当てた。

「揉むな」

「・・・じゃあ、魔術で大きくしまししょうか？」

「そういう問題じゃねえ」

ルークは再び舌打ちをして、ネネを片手だけで担ぎ上げる。彼女のふわっとした服が一瞬だけ風に靡き、ルークは手下たちの方を見遣った。

「後は任せる。」

明後日までに小競り合いを起こすなよ」

そしてネネは遅しいルークの肩に担がれたまま、大勢に見送られてその場を後にした。

ルークが連れて来たのは小さな小屋の2階だった。乱暴にベットの上に投げ飛ばし、ネネの細く白い首を片手で締め上げる。

「魔女だから誰からも手を出されなくても思っただか？」

嘲笑うかのような笑みを浮かべたルークは、さらに手に力を込めてネネの首を締めた。

もちろん手加減はしている。もし本気で力を込めていたら、今頃ネネの首の骨が折れているだろうから。

すぐに解放されたものの、首を押さえて苦しそくに咳をするネネ。

「本気で殺されたくなければさっさと去れ。

魔女がスラムの争いに首を突っ込むな」

「邪魔しませんから・・・恋人になるだけでいいの」

「そうか、じゃあ何されても文句は言うなよ」

驚くほど冷たい声で言い放ったルークは、ネネの胸元のボタンを乱暴に開けた。

当然彼女の白い柔肌が現れるかと思いきや、何故か大口を開けて「シャー――！」と威嚇している“へビ”が。

ルークの視線とへビの視線が交わり、服のボタンを

「・・・・・・・・・・」

――閉める。

「なんでヘビがいるんだ！」

「・・・バートリちゃんです」

「服の中にペットを仕舞うな!!」

ルークは我に返って口を閉ざした。

こんな若い女に本気で怒るのは馬鹿らしい、と思い直したようだ。

彼は舌打ちをして不満を残しながらも諦めたように言う。

「もう好きにしろ」

「恋人でも・・・いいんですか？」

「好きにしろ」

ネネの口端が一ミリほど僅かに上へ向いた。

いそいそと服をボタンを外し始め、間違いなくこれから事を致そうとしている彼女にルークが大声でストップをかける。

「それはもういい!!」

「・・・いいんですか？」

上目遣いで少し残念そうに言うネネ。ルークの額に青筋が浮かんだ。

「余計なことはするな」

「えー・・・」

「えー、じゃない」

こんなガキ抱けるかと心の中で吐き捨てるルークに、ネネは無表情のまま頬を膨らませる。ちよつと怖い。

「とにかく、もうすぐ大切な抗争がある。

邪魔だけはするな」

「・・・わかった」

言った傍からルークの膝にいそいそと頭を乗せたネネ。もちろんゲンコツが飛んできて、大きなタンコブが頭に出来た。

「邪魔するなと言ったばかりだろうが・・・」

「・・・痛い」

「当たり前だ、痛くした」

恋人という肩書きで何かが変化するわけではない。ネネが押しつけた一方的な想いに、ルークの想いは一致しないのだから。突然優しくしろと言われても、ルークの性格上不可能なことはネネ

もよく理解していた。

「・・・じゃあ、手を繋ぐだけでいいから・・・」

「うるさい」

彼が興味を示すのは自分の欲望のみ。恋人らしいことをしたいという女の子の純粋な思いなど知ったことではない。

手を繋ぐことすら拒否され下を向いたネネは泣いているように見えるだろうが、水色の髪の間から覗く彼女の口角は僅かに上がっていた。

3話 お見合いしましょう

スラムの日常は死と隣り合わせである。

ルークは血が流れる腹を抱えながら、人気のない小屋へ逃げ込んだ。そこは人が住んでいる気配がなく空家のようなだった。

好都合だとばかりのルークは外に敵がいらないのを確認して戸を閉める。

「大丈夫ですか・・・」

「・・・」

「・・・」

無言で見つめ合う2人。

誰もいないかと思いきや待ち構えたように空家に居たネネに、ルークは舌打ちと共に視線を外す。

「なんででめえがいるんだ」

「・・・怪我・・・」

ネネは座り込んだルークの身体を見た。

服に染みついている血のほとんどは返り血だが、シャツが裂けている腹部だけは彼自身のもの。深くはなさそうだがパツクリと肉が切

れているその個所にじいーっと見入るネネ。

「・・・おい」

「はい・・・治療しますね」

傷口に見入り残念そうに治すと言ったネネに、ルークは突っ込む気も起きず彼女と反対の方向を向いて身体を横にした。

ネネの白く小さめの手は、幹部を覆い隠すように指を開いてゆっくりと上に乗せられる。

ルークは傷口が少しずつ暖かくなるのを感じた。

「・・・これくらいしかできませんが・・・」

しばらくそのまま時間が経ち、ネネは手を引っ込めて申し訳なさそうに言う。

傷は多少良くなっただろうが、やはりまだ完全に治ったと言えるほどではない。血を大量に流したこともあり、ルークはそのままじっとしていた。

「本当に治ってんのかよ」

「自然治癒力を高めただけなので・・・治りが早くなるのは確かですけど・・・」

傷そのものをどうこうしたわけではない。

通りでまだ痛いわけだと、ルークは鼻で小さく嗤う。

ネネはルークが動けないのをいいことに、さらに近寄って頬に可愛らしくキスをした。

「・・・おい」

低い声で注意されるが無視し、彼女はルークの隣に寝ころんで頬を擦り寄せる。

ぴったりと身体を寄せて満足そうなネネ。

「・・・ノロゾイ組との抗争はどうなったんですか？」

「混戦中」

短く簡潔な答えにネネは首をひねる。

「・・・まだ終わってないんですか？」

「・・・ああ」

「スラムの歴史では・・・今まで誰も統一を果たしたことはないそうですね」

ネネは独り言のように小さな声でそう漏らす。

ルークの目的はもちろんスラムの全てを支配することだろう。それを成し遂げた者はまだドロージャの歴史上に存在しない。

現在では長らくルーク・ノロゾイ・ロイドの3組が均衡を保っていたが、最近は徐々に抗争が激化して勢力図が変化しているらしい。

「お前、もう出て行け」

「え・・・」

「奴らが俺の居場所を探してる。
本気で巻き込まれたいのか」

敵はルークが負傷しているのを知っている。

彼も一時的に小屋に身を潜めただけで、敵がいつここへやって来るとも知れない。

もし見つければ確実にネネも巻き込まれるだろう。巻き込まれるだけじゃない、ルークにとって足手まといなのだ。

「・・・バートリちゃん、見張っててください」

服の中からニョキッと顔を出した蛇が、横に波打ちながら外に向かって出て行った。

これで大丈夫、とネネは自信満々に言い切る。

一方でルークは呆れたように溜息を吐き、固く目を閉じて体力の回復を図ることにした。

ネネはルークと一緒にいるのが当たり前になると、“ルーカス・ブラッドが魔女を従えている”という噂がスラムで流れ、その噂がネネの師匠の耳にも届くこととなった。

久しぶりに帰宅したネネを待ち構えていた老婆は、部屋の中央を指さしてネネを正座させる。

老婆は深いため息と共に胸の内を語った。

「ネネ、もうあの男に付き纏うのはお止め。
魔女とは国に従う生き物。犯罪者の恋人など、自分の首を自分で絞めていることと同じ」

「問題・・・ない」

「お前は国に携わったことがないだろうから自覚がないであろうが、
魔女はドローシャ王に逆らうことができぬ。

そもそも魔女は中心の国と呼ばれるドローシャにしか生息しない貴重な存在なのだ。

神の恩恵を最も多く受けているこの地で魔女が生きる、これには非常に意味のあること」

老婆からの説教に唇を尖らせるネネ。

今更世界の理を説かれたって、ネネの心を動かすことはない。

「高い地位を約束されているお前が、あのような誰とも知れぬ男に懸想するのは国にとって大きな損益になる。

本来ならお前ほど若い魔女なら王に嫁ぐのが慣行だというのに・・・

」

「・・・でも現ドロージャ王にはもう魔女が嫁いでるじゃない」

「身分が高いのは王だけではないよ」

老婆はしたり顔で分厚い紙の束を取り出した。

一枚目をネネに見えるように掲げると、それはハンサムな男が描かれた人物画だった。

「こうなったら見合いでさっさと結婚相手を決めた方が話が早いだろう。」

案ずるな、面喰いのお前のためにそこそこ見られる男を集めた」

「え・・・」

「ほら、この男なんでどうだ？

文官でなかなか頭が切れる」

最初に勧められたのはネネと同じ水色の髪の毛、中世的な顔立ちの男性だ。

「・・・弱そう。」

ルーク様はとても強いもの」

「これならどうだ、貴族出身の兵士だ」

「・・・マッチョは嫌。」

ルーク様みたいに太すぎず細すぎず、程よく質の良い筋肉でないと」

「おすすめだ、これならよからう」

「・・・ルーク様みたいな色気がない」

「これなら！」

「・・・男らしくない。」

ルーク様みたいに野性的でなきゃ」

「じゃあ、この男！」

「・・・なんだかバカっぽい。」

ルーク様は知性にも溢れてるから」

「ならば、剣が強くて太すぎず細すぎず程よく質の良い筋肉で色気があつて野性的で知性を併せ持つ男！！

レオナード陛下ならどうだ！！」

じゃん、と派手に取り出したのはドロージャ王の絵。

確かにネネの注文はすべてクリアしていると言っていていいし、世界で最も美しく強い男性である。

「・・・寧猛さが足りない」

「お前は結婚相手に何求めてんだあ！！」

ブチ切れた老婆は絵をぶちまけて怒った。ドローシャ国内から集めた選りすぐりのお見合い相手のすべてにダメ出しされるとは。

ネネの注文が多すぎることも原因のひとつであるが、とどのつまり、ネネはルーク以外の男を認めることはないのだ。

ネネは無表情のままそっぽを向き、視線を逸らされたのが気に食わなかった老婆はネネの顔を掴んで自分の方へ無理やり首を捻る。

「よいか、お前はもう一度この世界がなんたるか、魔女とはどんな存在なのか、そこから勉強し直しだ。

わたしは買出しに行ってくるから、その間に全て目を通しておくように」

宣言通り財布と籠を持って小屋を出て行く。

老婆が去った部屋で、渡された本に視線を落としたネネは小さく息を吐いた。

「世界には中心がある。その中心には神がいると言われ、そこに位置しているのがドローシャ王国であり、他国では見られない様々な恩恵を受けている。例えば魔女が生まれるのも国内のみで他国には存在しない。また、神の宣託により王が決められるのもこの国の特徴である。人々の寿命も中心に近づけば近づくほど長く、国内では約1万年だが隣国では約9千年、遠く離れた国では6千年と大きな違いがみられる。神の住まう世界の中心、それが我がドローシャ王国である。」

子どもから大人まで耳がタコになるほど聞かされた有名な記述。その後はいかに魔女がドローシャにとって貴重な存在なのだとか、

神に選ばれた王がいかに優れているかという、ネネにとっては非常につまらない文章が続く。

魔女がこの国だけでなく世界にとっても有益な存在であることはネネも理解している。

その存在は自由の地であるドロージャのスラムでも無視できないほどであり、魔女だからという理由だけで誰にも危害を加えられることはない。

あのルークでさえ、ネネが魔女であるから殺すことはしないのだ。

魔女、スラム、監視者。

様々な言葉がネネの脳内を駆け巡るがやがてどうでもよくなった彼女は、老婆が絵をぶちまけたように本を放り投げて立ち上がった。

いちいち教えや地位に縛られるなんてスラムで育った人間らしくない。

この恋を否定されるくらいなら、堂々とここを出て独り立ちしてみせよう。

満足気にコクリと頷いたネネは、家中の自分の荷物を集めてトランクに文字通り押し込んだ。

最後に窓辺で昼寝していたペットの蛇を、胸元から服の中に仕舞う。

家から出て振り返れば、そこには8年間近くお世話になったボロ小屋。ここでネネは魔女としての修行に励み、師匠と共に生活してきた。

爆発した思い出もあれば、火事にした思い出もある。その度に師匠があたふたと駆けまわり修復を繰り返してきた。小屋をぶっ壊した

当の本人であるネネは傍観していただけだったが・・・。

「・・・さようなら」

風にかき消されてしまいそうなほど小さな声でネネは呟き、正面を向いて自立への一步を踏み出した。

「ああああああ!!わたしのへソクリがああああ!!」

——師匠のへソクリと共に。

4話 祝杯は敵襲とともに

見事ノロゾイ組を打ち倒したルーク一行は、アジトの一つで祝杯を上げていた。

好き勝手に安い酒を煽る手下たちとは対照的に、ルークは独り離れた所で椅子に座りワイングラスを煽っている。ありきたりな行為でもルークには王者としての品格と威厳があった。いつにも増して彼の機嫌がいいのは、強大な勢力であるノロゾイ組を倒したからだろう。

「乾杯！！おら、飲め飲め！！」

瓶ごと傾けて一気に飲み干す男達。大口を開けて豪快に笑い、お酒の消費量も早い。

そして彼らの視線の先にあるのは、独りで酒を楽しんでいるルークだ。

「さすがルーク様！」

あのノロゾイと一騎打ちで勝つちまうとはな！」

「見たかよ、最後の一撃。あれどうやるんだろっな」

「だがよ、ルーク様について来て正解だぜ。
見るよ、あのヨダレが出そうなほどの色気」

「俺ルーク様になら抱かれてもいい！」

「だよなあ。」

でも俺たちみてえな色も糞もねえ男相手にしないっつの!」

がはははは、と下品に笑う手下たちに混ざって、うんうんと頷くネネ。

近くに居た手下たちは驚きのあまりズササササササッ!と後ずさった。

「い、いつの間に・・・!!」

「居たのかよ!」

「神出鬼没だなあ、おい!」

いきなり現れた魔女に、心臓をドキドキ言わせてため息を吐く一行。ネネは驚かせてしまったと少し申し訳なさそうに話す。

「・・・いえ、ルーク様関連の猥談をしていたから、つい・・・」

「猥談じゃねえ・・・ってか興味あるのかよっ!」

無表情のままコクリと頷くネネ。欲望に正直である。

「・・・あ、飲む?

ネズミの肝臓と鳥の目玉酒」

ネネが差し出したのは、瓶に目玉が入った緑色の液体だった。ぶかぶか浮かんでいる目玉が生々しく恐ろしい。

「「「ぎゃあああああああ!」」」

いい歳した大人たちが泣きべそをかきながらゴキブリ並みの速さで散り散りに逃げて行く。

ぼつんと中央に取り残されたネネの身体が、急にふわりと宙に浮いた。——ジェルダに首の根っこを掴まれて持ち上げられたからだ。

「貴様、まだルーク様の周りをうろちよろしておったか」

虎視眈眈と獲物を狙う鷹のような鋭い視線がネネを貫く。

不快感と嫌悪感を露わにしたジェルダは、ルークと同じく普通ならば逃げ出したいほどの殺気が込められていたが、図太いネネにはまったく効果がない。

「・・・恋人、ですから」

「ルーク様はお前のようなガキに興味はない」

ガキと言われ反射的に自分の胸に視線を落とす。

「そういう意味じゃない!!」

ルーク様はいずれこのスラムを支配する御方!!

お前の相手をしている暇などないんだ!!」

「えー・・・」

「えー、じゃない!

さっさと出て行け!」

大声で怒鳴っていた所為で吹き抜けの天井いっばいに声が響き、ア

ジト中の人々の視線を集めてしまった2人。

静かに飲んでいたルークも黙っていられなかったのか、ネネの方を向いて顔を険しく歪めながら口を開いた。

「また来てたのか」

「・・・はい。」

あ、飲みますか？」

ゴッソーン！！

目玉酒を掲げるとジェルダから頭突きを食らう。ネネの小さな頭から小気味いい音が鳴り、一瞬脳みそが揺れたような感覚があった。

「そんな下卑た物をルーク様に勧めるな！」

「・・・痛い・・・」

「ジェルダ、やめろ」

制止をかけたルークにジェルダは驚いてネネを解放する。

すとな、と地面に足を着いた彼女は掴まれてくしゃくしゃになった襟を正す。

「なぜ止めるのです」

「小娘相手にムキになるな」

バカが、と吐き捨てるルーク。

敬愛する主に庇われたネネをジェルダは恨めしそうに見遣った。

ルークの為を思ってネネを注意したのに、逆に自分が咎められるの

は納得がいけない。

「良いのですか？

こんな――頭のネジー本外れた人形みたいなものを傍に置いても」

「イイ男つてのは寄つて来た女を上手く利用してやるもんだ」

ピュー、とはやし立てるような口笛が飛び交う。

「さすが頭！」

「男前！」

「てめえら煽るな！」

ジェルダは大声を出して手下たちを注意するが、皆一様にネネを傍に置くこと自体は反対していないようだった。ネネが魔女であろうが怪物であろうが、尊敬するルークが決めたことに逆らうことはない。ルークがイエスと言えば全てがイエスなのだ。本来ならば、ジェルダも。

しかし彼はイエスを言うことができない。

まるで人形のように表情がなく、ゲテモノをこよなく愛する魔女。容姿も強さも完璧であるルークの恋人に相応しいか、それは言わずとも解るだろう。

奥歯をギリギリ鳴らして睨んで来るジェルダを無視し、ネネがいそいそと目玉酒を服の中に仕舞ったその時だった。

急にアジトの外が騒がしくなり、皆は武器を手にとって即座に警戒

する。

外を覗いた手下が顔を真っ青にして叫んだ。

「敵襲です!!」

見張りの奴ら全員殺られちゃってる!! 囲まれてます!!」

「落ち着け」

「・・・ルーク様、このお団子食べてもいいですか？」

「お前はもう少し慌てろ」

――敵襲。

ノロゾイ組を倒したばかりこのタイミングは、疲弊しているところを狙う魂胆だ。

現に2大勢力の抗争で多くの手下を失ったルークにとって、最悪のシチュエーションともとれる。手下たちは一様に顔を険しくして不安そうに武器を握りしめた。

「情けない面をするな、たいしたことじゃねえだろ。
戦力を一点に集中して包囲網を崩す」

「「「わかりやした!!」」」

ルークの指示で困惑から闘志漲る表情に変わった手下たちは、指示通りに同じ方向へ走って剣を振りかざした。
敵はすぐそこまで迫っている。

「ジェルダ、先に行け」

「わかりました」

ジェルダも大剣を持ち駆けだして行き、椅子に座ったまま動く様子のなかったルークもやっと立ち上がって腰の剣を抜いた。

そして視界の端に映ったのは、のん気に団子をもごもごと咀嚼しているネネ。

「・・・たく」

無視して行きたいところだが、ルークは仕方なくネネを小脇に抱えて歩き出す。

アジトを出れば想像していた通りの混戦状態になっていた。敵味方入り混じり、四方から金属音が響いてくる。

「はっ、舌嚙むなよ」

自分を囲んだ敵を見て鼻で嗤い、ルークはそう言々と不敵に笑った。

片手で敵を薙ぎ払うルークの剣技は凄まじく、ネネを小脇に抱えていたため絵になるかと言われれば微妙であったが、スラムの住人が名前を聞いただけで震えあがる理由を知ることのできる程度の働きをしたルーク。見事に敵の包囲網を破ったものの、その先に待ち構えていた別の集団の攻撃を受けて皆ははぐれてしまった。

追いかけてくる敵を巻き、身を隠すために入ったのは民家の屋根裏。手入れされているのかそこまで汚くない。

ルークは人の気配がないことを確認してから、荷物のように抱えていたネネを下ろす。

「・・・ロドスにノロゾイの残党が、通りで数が多い」

機嫌はいつになく最低である。

ロドス組の襲撃を受けただけでなく、ノロゾイ組の残党と組んでルークの首を取りに来たのだ。

せめて今晚くらいはゆっくり飲んで過ごしたかったものを。

「・・・皆、大丈夫でしょうか・・・」

「殺られたんならそれまでの奴だったってことだ。

弱い奴に興味はねえ」

仲間を見捨てるような発言はシビアだがここはスラム。ルークの言

うとおり弱い者が生き残れる世界ではない。

ネネはぎゅっとルークの腰に抱きつき、無表情ながら嬉しそうに頬ずりしている。

機嫌の悪いルークは心底鬱陶しそう。

「・・・離れろ」

「せつかく・・・2人きりになれたのに・・・」

「こっちは悪夢だ」

ベリツと引き剥がされたネネはまるで子犬のような瞳で訴えた。2人きりになったのだからもっと構ってほしい、と。

しかしルークは大きなため息を吐いて視線をそらす。

「もう少し表情変えられないのかよ。人間と居る気がしねえ」

喜びも悲しみも顔にほとんど表れないことを指摘されたネネは自分の顔を手で触って首を傾げた。

「人間っぽくない・・・ですか？
欲求沸きませんか？性的な」

「ない、ついでに欲求も沸かない」

「じゃあ、ダッチワイ——」「ガッン——！」

ゲンコツを喰らったネネは頭を押さえて蹲る。

「まったく、もういい。
とにかくお前は黙ってる」

「・・・・・・・・うつ」

忘れてはいけないのは2人とも侵入者だということ。

下の階ではこの家の住人がすやすやと眠っていることだろう。あまり物音を立てると起こしてしまう。

敵に追われている身であるルークはもちろん警戒を怠るわけにはいかず、はつきり言ってネネを相手にする暇はないのだ。

「邪魔だ、寝ろ」

「誘われた？」

キャツと頬を染めて喜ぶネネに、もう一発ゲンコツがお見舞いされた。

「“独り”で寝てろ」

「・・・・・・・・はい」

ぽつこりと盛り上がったタンコブを抑えつつ、ルークの膝を枕にして横になるネネ。

ルークはもう注意する気も起きず、されるがまま黙り込む。

「・・・・・・・・ルーク様は寝ないんですか？」

「・・・・・・・・お前は追われてる自覚がねえのか」

苛々した口調で返答するルーク。

2人とも寝てしまえば敵に見つかった時、抵抗することもなく殺されてしまうだろう。

当然見張りが必要になるが、ネネに任せると不安なのでルークがやるしかない。だからルークはネネに寝ると言っただのであるが、ルークが戦っている間腕にぶら下がったままお団子を食べていたネネに彼の意図が理解できているか否か・・・。

「抱き枕が欲しい・・・」

理解できていないようだ。

ルークは膝の上に頭を乗せているネネにデコピンをし、盛大にため息を吐いた。

5話 娼婦ルージュラ

炎が建物を覆い、パチパチと弾ける音を立てて全てを燃やし尽くす。広い部屋で目を覚まし身体を起こすと、霞む視界に白い女性の足を捕えた。

透き通って見えるほど肌の白い女性はいくぐる回る。こんな熱い場所では何が楽しいのか、クスクスと降って来る楽しい笑い声と鼻歌。

『……………』

何かの言葉を耳元が囁かれるが、その言葉を聞き取ることができない。

重く自由の利かない身体はズルツと腕の支えを失い崩れ落ちる。

すると、彼女のぬるりと生暖かい手が自分の顔を掴み、無理矢理上を向かされた。

見えたのは口角を上げている唇。

その唇はゆっくりと吐息がかかるほどに近づき、そして――

急に視界が開けると、目の前には小綺麗な天井があった。
ルークは汗だくの額を乱暴に拭い、先ほど見た夢の気味悪さに眉間の皺を深くする。

コンコンと控えめなノックを共に部屋の扉が開き、入って来たネネの姿を見て全てを思い出したルーク。

ノロゾイ組との抗争に勝ち祝杯を上げていたところに、ロドス組の襲撃を受けて民家の屋根裏部屋に隠れた。その後陽が昇ると共に2人は小さなアジトの一つである娼館へ移動したのだ。

一睡もしていなかったルークはすぐに就寝し、現在に至る。

「・・・目が覚めたんですね」

ネネはルークの顔をのぞき込み、すんとベットの端に腰を下ろした。

無言でじろじろ寝起きの顔を見られるのは不快だと、ルークは寝がえりを打ってネネに背を向ける。

「ジェルダはまだか」

「まだ来てないです。」

「・・・あ、でも他の方なら何名か・・・」

チツと小さく舌打ちをするルーク。
そしてネネが何か口を開きかけたとき、再びノック音が部屋に響いて扉が開いた。

やって来たのは胸元が大きく開いたドレスを着ている女性。金髪巻き毛のグラマラスな美女だった。

「お目覚めかい？」

彼女はこの娼館のボスとも言える女性で、名はルージュラ。

ルーク組の手下の一人であり、匿う場所を提供している1人でもある。

「水持って来たよ」

彼女の手にある盆の上に乗せられた水差しとコップを見たネネは、今までになく素早く立ち上がって盆を受けとろうと手をかけた。

しかしルージュラは手に力を込め、奪い取られまいと自分の方へ引き寄せる。

寝起きのルークの傍で行われている無言の女の戦い。お盆を制すれば、ルークに水を差し出す権利を得ることができるのだ。

お盆を引っ張り合っているうちにそれはあらぬ方向へ飛んで行き、バシヤツと水音を立ててルークはずぶ濡れになった。

額に青筋が浮かぶルークにルージュラは顔を真っ青にして慌ててタオルを探し始める。

「ご、ごめんよルーク。」

このチビが邪魔するから・・・」

「・・・人の所為にしないでもらえますか、オバさん」

睨みあい火花が散るとはこのことか。

ずぶ濡れのルークそっちのけで2人は睨み合い、両者ともタオルを掴んで再び奪い合いが始まった。

しかしそのタオルは最終的にルークが無理やり奪い取り終わりを告げる。

「出て行け」

「でも・・・」

ルークに睨まれたルージユラは何か言いたそうに口を開きながらも、顔を悪くしてすくすく出て行った。

残ったネネはぽつんと立ち尽くしてルークを見上げる。

「お前も出て行け」

「・・・はい」

扉へ向かったネネは名残惜しげに一度だけ振り返り部屋を出て行った。

ルークはタオルで濡れた髪を拭き終わると、ベットの傍に置いてあった自分の剣を手にする。

スラムを支配するまで、残った強大な勢力はあと一つ。

ここで手をこまねいている暇などない。

ルークは抜いた剣の刃を眺めると、剣を素早く鞘に納めた。

ルークに部屋を追い出されたネネの前に仁王立ちしているのはルー
ジュラ。

「まったく、あんたの所為で追い出されちまったじゃなか。
久しぶりに会ったというのに、まったく相手してくれないなんて」

ぶつぶつと文句を言われるがネネは全くの無視を貫く。

ルージュラはさらに不機嫌顔になってネネの鼻に人差し指を突き付
けた。

「だいたい、なんでルークの恋人がこんなへなちょこりんのガキな

んだ！

魔女っていうのは美貌で品の良い生き物だと聞いていたのに」

「・・・知ってるの」

「当たり前だよ。娼館はスラムの情報の溜まり場さね。

荒廃の魔女の弟子が赤獅子の恋人になったことくらいあたしたち娼婦は知ってて当然だ」

赤獅子？と無表情のまま首を傾げるネネに、ルージユラはそんなことも知らないのかい！？と大きな声を出して詰め寄る。

「だって・・・興味ないもの・・・」

ルークを知る前までスラムの情勢に全くの興味を示さなかったネネ。当然ながら勢力争いには疎い。

「呆れたね、まったく。

ほら、おいで」

ルージユラはネネを少し離れた部屋に案内しお茶を出した。

他の娼婦を纏め上げる器を持っている彼女は、なんだかんだで非常に親切だ。色気を前面に押し出している風貌にも関わらず、その内面は割とさばさばしているらしい。

ネネがお茶を飲み始めると、ルージユラは向かい側に座って話し始める。

「赤獅子ってのはね、ルークの異名さ。あだ名みたいなものかねえ。昨今のスラムは3大勢力で成り立ってた。赤獅子ルーカス、黒烏口

ドス、猿王ノロゾイ、この3つでね。

でも一昨日にルークがノロゾイの首を取っただろう?」

こくり、とネネは頷く。

「だからは今目まぐるしく勢力図が変わっててね。

ノロゾイの残党がロドスに加わっちまったものだからさ」

当然ノロゾイの手下たちは自分の頭の首を取ったルークを恨んでいる。

一方ロドス組はスラム統一まであとルークの首を取るのみ。双方の利益が一致したわけだ。

ルージュラはふう、とため息を吐いて唇を歪めつつ続けた。

「まあ、この通りあたしらは赤獅子の一員。ルークがスラムを支配しちまえばいいんだけど、難しいだろうねえ。

スラムはこの不法地帯という土地柄、今までも多くの有名人を排出してる場所。灰色の殺し屋シルヴィオからノースロップ王国の革命家エヴァン、殺戮王子ステファアまで様々。

これからもいろんな奴が台頭してくるだろうし、例えばスラム統一を果たしてもルークの道のりは平坦じゃないよ。覚悟しときな」

ネネは紅茶をテーブル置き、ルージュラの目を見てゆっくりと口を開く。

「・・・貴女は、ルークが好き?」

「あーっはははははは!!何言い出すんだい!!」

大きく口を開けて女性らしからぬ笑いをするルージユラ。テーブルを手でバンバンと叩き、豪快に腹の底から笑い声を出した。ふーっ、と最後に大きく息を吐き、身を乗り出して肘を突く。

「あのね、魔女ちゃん。

スラムの女は恋をしないの」

「・・・なんで？」

「恋に溺れて生きていけるほど、ここは生易しい世界じゃないのさ。特に、女子供にとってはね。

だから恋はしないの、自分を守るために。金を出さない奴に抱かれるような真似はしないよ」

「じゃあ・・・ルーク様は？」

ルージユラはルークの名前を聞いて片眉を上げる。

「そりゃあいい男に好かれれば気分はいいさ。

ルークほどの権力があれば、生活には困らないし。でもそれだけだ。

あんたみたいになちっこいのを恋人にするなんて意外だったけど」

ネネはちっこいと言われて反射的に自分の胸に手を当てる。

「いや、胸じゃなくてね・・・。

まあ、一番変なのはあんたの顔かねえ」

「・・・変？」

「当たり前だろ、なんでずーっと無表情なんだい。
まるで人形みたいだよ」

「表情・・・ある、たぶん」

「どこがだ」

「ある・・・・・・・・たぶん」

ルージュラは「まあいいさ」と呆れた様子で話を流した。

「魔女ちゃんは一応ルークの恋人って話だから追い返しはしないけど、あんたは目立つんだ。

あまり派手なことほしなくてくれ。

あんたが人の目に触れればルークを匿ってるってバレちゃう」

「・・・・・・・・わかった」

「それから、服の中でペットを飼うのはおやめ」

ルージュラは視線を反らしてネネの胸を指差す。

ネネの胸元からは、ニョキッとヘビが顔を出していた。

6話 ある男の災難

娼館の朝は遅い。

営業を始める少し前に部屋を用意させたルークは、手下を集めて酒を煽った。

「これだけしかいねえのか」

この娼館へやって来た手下はたったの10人余り。襲撃を受けたアジトから一番近いのだが、他の潜伏場所へ逃げた手下が多かったらしい。

手下の一人が返事をして説明する。

「へい、ジェルダの旦那が先鋭隊を連れて東の方へ行っていたので、たぶんそちらかと・・・」

ただ、戦闘中にはらけていたので一所にはいないかもしれません」

「つたく、めんどくせえ」

別々の潜伏場所に居るならば集めるまでに時間もかかるし情報の伝達も遅い。疲弊したところへの襲撃で大打撃を受けたルーク組にとつては、少しでも早い段階で戦力を確保しなければならぬため、喜ばしくない現状である。

特にルークの右腕でもあるジェルダがいない事は大きな問題だ。

「あの、頭・・・。それより・・・その・・・」

手下たちは言い辛そうに口ごもりながらルークの横を控えめに見遣る。

視線の先に居るのは頭の上に蛇を乗せたネネの姿。もう何がしたいのかさっぱり理解不能である。

「無視しろ」

「でも・・・」

「無視しろ」

とても気まずい空気の中はつきりと言い放ったルークの言葉に頷く一同。

手下たちは極力ネネを視界に入れないよう気をつけながら話を続けた。

「・・・襲撃で確認された敵の数は約150、失った味方の数は約50ほど」

「大した数じゃねえな」

「へい、しかしノロゾイの残党を組み入れたロドス組の他、新たな組織が形成されつつあるとの情報もあります。」

現状で我々は圧倒的に不利で・・・――」

バシヤツと水音とともに手下が水浸しになる。

ルークが杯の酒をかけたからだ。

「俺の前で弱音なんぞ吐くな」

「・・・す、すみません・・・」

慌てて布を探し酒を拭う手下たち。

酒に濡れた男はルークを苛立たせてしまったと、顔を真っ青にして頭を下げた。

日が傾き始めた頃、ガヤガヤと部屋の前の廊下が騒がしくなり、扉が開くとともに煌びやかに着飾った女たちが入って来る。部屋に香水の香りが漂い華やかな空気になった。

スラムでは高級な部類に入る娼館だけあって、女のレベルもなかなかのものである。それぞれが個性的ながら美しい。

「きゃあ！ルーク様だわ！」

「やっぱりいらしてたのね！」

きゃいきゃいと黄色い声を上げながらルークに群がろうとする娼婦たち。――しかし

「きゃあああああ！！」

「へび！！へび！！！！！！！！」

「いやあああああ！！ルージュ様あああ！！」

ネネの頭の上に居る蛇を見て一斉に逃げだした。

「……（このためだったのか……）」

納得する手下たち。再び一気に静まり返った部屋。
言い表しようのない気まずい空気が漂ったが、ルークはまるで何事もなかったかのように続ける。

「とにかく、戦力確保が第一だ。
早急にジェルダを探せ」

「……へい！！」

「俺は武器商人を当たるが、後はお前らに任せる。
あまり派手に動くなよ」

ルークは腰に差した剣を鞘ごと引き抜き、剣先を地面に着けて肘を柄頭に置いた。

ネネは空になったルークの杯にお酒を注ぐと、何を思ったのか無表情のまま頬を染め、キャツと顔を背けながら言う。

「ルーク様と結婚したらネネ・ブラッドになりますね」

ブフオッ！！

突然の珍言にルークはお酒を勢いよく吹き出して、先ほど酒浸しになった手下が再び犠牲になったのであった。

ネネの容姿は非常に整っている。

他の要素が強烈なために忘れそうになるが、僅かに幼さの残っている顔は愛らしく好ましい。肌も病的なほどに白く透き通っており、娼婦のグラマラスな色気とはまた違う魅力を持っていた。

ネネ自身はその容姿を、まったく言っていないほど生かせていないが……。

「ああああ、最悪だああ」

先ほどルークに酒をぶっかけられた男は頭を抱えてうずくまった。ネネの余計な戯言でルークの機嫌がさらに悪化し、手下たちは八つ当たりという名のとばっちりを受けたのだ。

当の本人たち2人が去った部屋で、他の手下たちは彼に憐みの視線

を送る。

「運が悪かったとしか・・・」

「だな、今は大変な時だからさ。
ルーク様も虫の居所が悪かったんだろ」

「魔女様には逆らえねえしなあ」

腕を組んでうんうんと頷く手下たち。

例えルークの機嫌を損ねる原因がネネにあつたとしても、魔女である彼女に危害は及ばない。もちろんルークの暴力や暴言もそれなりに受けているだろうが、マイペースなネネは全く意に介さないので効果は薄い。

一方でとばかりを受けている手下たちはもろにダメージを食らっているのだ。不満は募るばかり。

しかしルークにその不満を言うわけにはいかず、こうして仲間内で愚痴を溢しながら酒に走る。

「ルーク様もルーク様だ。」

こんな大切な時期に女囲うようなマネしねえ人だと思ってただけど・・・」

「仕方ないだろ、魔女なんだし」

「魔女つつたつてよお、負傷させなきゃ問題ないだろうが。」

あの唯我独尊のルーク様が傍に置いておくほどの価値あんのか？」

男の口は止まらない。

尊敬し命を預ける主にとりついた虫。あまりいい気分ではないらしい。

しかし手下の中で際立って可愛らしい容姿の男が反論する。

「魔女つてのはそりやもう特別な存在だろ。

本気になったらスラム全体を吹っ飛ばせるくらいの恐ろしい生き物だ」

「やけに詳しいな、お前」

「そりや、スラムに来る前は王妃仕えしてたからな」

「んだとう！？」

「マジかよ！」

驚く手下たちの前で彼は苦笑いする。

「ちょっとやーな騒動に巻き込まれて責任取らなきゃならなくなっちまったんだよ。

せっかくエリートコース走ってたのに」

「王妃仕えって何やってたんだ？」

「將軍」

ブフォツと誰かが噴き出した。

將軍と言えば軍のトップ、しかも王妃軍の將軍ともなれば、国政の中でも指折りの権力者だ。

「おいおい、なんで將軍様がスラムの下っ端不良なんかになったんだよ」

「だから責任取らなきゃならなかったんだって。
30年前にノルディ戦争あっただろ？」

「あー・・・そんなのがあったようななかったような」

スラムは完全とまではいかないが、外界とかなり遮断されているため外の情報には疎い。

ノルディ戦争とはドロージャの近隣で起こった最も記憶に新しい戦争であるが、スラムの住民である彼らにはあまり知られていなかった。

「ノルディ戦争ってのはオーティス王国とベルガラ王国がノルディって土地を巡って争った戦争のことさ。

ドロージャが仲裁に入ろうとしたがすつとこどつこい、ドロージャの王妃軍が何故かオーティスを攻め入ったんだなあ。しかも王妃の命令でもないのに」

まるで第三者のような語り口をしているが、彼はオーティスに進軍した張本人である。

「なにやっただよ、お前・・・」

「俺も騙されたんだって。

当時の王妃軍全責任者であるクロード様が『王妃の危機だから指示はないが進軍する』って言ってたから、すっかり信じ込んだんだよ。けど後から聞いた話だとクロード王子がベルガラと内通してて？

もちろん王妃の危機だなんて嘘っぱちで？しかもオーティスの王妃がうちの王妃と親友で？

そりゃもってんてこまい、後の祭りってやつでさ」

自嘲気味に言い切った彼は瓶に口をつけて酒を飲んだ。

他の手下たちははあ、と感心するような呆けるようなため息を吐く。

「難しいことはよくわからんが・・・災難だったなあ」

「まったくだ。」

つてわけで、王妃に仕えてたから魔女がどんなもんか知ってるんだ。俺に言わせればおっそろしい化け物みてえなもんだな。

オーティスの死人を蘇らせたり、ベルガラ王宮を一瞬で吹き飛ばしたり」

魔女が怖い。

その気持ちは徐々に他の物にも感染していき、皆は一樣に顔の筋肉を強張らせた。

他の男が苦笑いをしてフォローをする。

「で、でもさあ、それは王妃に限ったことだろ？

うちの魔女さんはまだ若いし・・・そんなに人間離れしてるわけじゃねえさ」

「・・・わたしが、何か？」

「「「ぎやあああああああ！！！！」」」

気配無く突如現れたネネに、一同はまるで幽霊でも見たかのような

反応をした。

ネネは相変わらずの無表情のまま首を傾げる。

「……猥談？」

「いや違うから!!」

手下が突っ込むとネネは先ほどルークに酒浸しにされた男の方を向き、手に持っていた黒い液体の入ったコップを差し出す。

「あの……これ……さっきのお詫びの品。

わたしの所為で、お酒かけられちゃったから……」

男は反射的に身構え、皆はコップの中をまじまじと見た。

ネネにはいろいろと、それはもういろいろと前科があるため、手下たちは多少学習している。

ネネから物を受け取るべからず。

差し出された男は顔を引きつらせて訊ねた。

「な……なんですかね、これ……」

「コーヒー……」

わっと声上がる。

コーヒーや紅茶は庶民にとって特別な時しか飲めない高級品。スラムにおいてはほとんど言っていないほど流通していない貴重品だった。

「いただきます！」

コーヒーの誘惑に負けた男はパツと笑顔になってコップを受け取り、一気に傾けて喉を鳴らしながら飲み干した。もったいないとヤジが飛ぶ中、急に男が固まって動かなくなる。

まさか薬か？と緊張が走るが、理由はすぐにわかった。

コップの下の方に沈んでいる、何かうねうねした白い物体。

「い・・・いもむし・・・」

男は白目をむいてひっくり返った。

7話 私を利用して

娼館が爆発した。

「一体何事だい!!」

ルージユラは頭を抱えながら大声を出す。

敵に居場所を悟られないために移動したルークたち。手下らは情報収集のために全て外へ出ており、幸いにも娼婦たちに怪我はなかった。

しかし前触れもなく突然破壊された娼館は修復しなければ住めない有り様。

「全く怪我がなかったからいいものの!」

一瞬ネネと視線が交わったが、彼女はすぐに顔ごと逸らす。

「姉さまどうしよう・・・」

「仕事、しばらくできないわよね・・・」

不安気な症状でルージユラを見上げる娼婦たちに、ルージユラは優しく肩に手を置いて頷いた。

「大丈夫、お前たちはあたしの知り合いの娼館に行くといい。
そこで働かせてもらいな」

「姉さん!!」

「ルージユラ様——!!」

一気に抱きつかれ団子状態になったルージユラは、もみくちゃになりながら「それよりも」と話を戻す。

「なんで爆発なんてしたんだい？
敵襲じゃないみたいだし……」

その時再びルージユラとネネの視線が交わるが、ネネがすぐに顔を背けた。これは明らかに怪しい。

「お前かあああ!!!!」

ぐわし!!とネネの小さな頭が驚掴みにされ、ネネはわたわたと手をばたつかせた。

「お前か、お前だろう、お前以外考えられない!————なんで爆発させたんだ!!」

「……………暇だったから」

ボソリと聞こえるか聞こえないくらいの声で言ったが、ルージユラの耳にはきっちり届いている。
両頬を引っ張り間抜け面になったネネの顔。

「あんたのお陰であたしは今日から無職だよ」

ルージユラの手が離れると引つ張られていた頬が赤く染まっているのがわかった。

さすさすと小さな手で摩りながら淡々と答えるネネ。

「それも運命……」

「お前が言っな!!」

例え原因が分かったとしても爆発した娼館が戻って来るわけではない。

ルージユラはネネとの不毛な会話を早々に諦め、思考を現実的な問題へと移す。

「仕方ない……こうなったら修復するしか……」

「……ルーク様、眠たい……」

「あんたはもうちょっと反省しな! まったく……」

言葉も出ないと呆れるルージユラ。

一方で我関せずで話を聞いていたルークは立ち上がり、眠そうに目を擦るネネを小脇に抱えた。

「ルージユラ、娼館は手下に直させる。

それまで身を隠しておけ」

ルージユラはぽかんと口を開けたまま去っていくルークを見つめた。

―――手下に直させる。

それはつまり、ネネの仕出かした問題をルークが処理するということ。

言い換えれば、ルークがネネを自分の物として扱っているということである。

ルークの気前がいいわけではないが、自分で落し前をつける性質だ。ネネを自分の領域であると認めているからこそ、彼は修復を申し出た。

なんだかんだ言いながら、彼はネネを傍に置くことを認めている。誰にも心を許さず受け入れなかった“あの”ルークが、だ。

意外すぎて言葉も出ないルージュラは、言い様のない感情に顔をだんだん赤らめて半開きになったままだった口を動かす。

「そ・・・そうかい・・・へえ・・・」

「ルージュラ姉さん、私あの子怖い・・・」

「なんだか不気味よね」

「そうだねえ・・・」

娼婦たちは表情のないネネを思い出す。

何をして何を言っても感情を表に出さない、まだ少し幼さを残している魔女。

ルージュラは赤らめていた顔に手でパタパタと風を送りながら難しい顔をした。

「確かに・・・少し気になるね・・・」

ルークは微睡んでいるネネを小部屋の隅っこに下ろした。
すぐに立ち去ろうとしたが、ネネが服の袖を掴んで放さない。

「・・・おい」

「もうちょっとだけ・・・」

だめ？と上目使いでお願いするネネに、ルークは眉間の皺と盛大な溜息で答えた。

仕方なく隣に腰を下ろすと、ネネはさらに強く袖を握りしめる。

うつらうつらと頭を揺らしつつ、眠そうな声で話し始めた。

「あの・・・怖い人、私が探しましょうか・・・？」

怖い人はジェルダのことであろうと見当をつけたルーク。

困窮しているルーク組の為を想ったネネの申し出に、ルークは鼻で嗤って即座に拒否する。

「余計なことをするな」

ネネの中では自分の力を拒否された悲しさと自分を利用しないルークへの感動が渦巻く。非常に微妙な気分だ。

「・・・利用していいのに」

小さく零れた言葉。

ルークになれば利用されても構わない。例えそこに自分への愛情がなくても、例え利用し尽くした後には捨てられたとしても。

ルークが自分を必要としてくれる、それはネネにとっての喜びなのだから。

「必要ない」

占術を使えばジェルダの居場所も簡単に知ることができるだろう。呪術を使えば敵を簡単に殺すことができるだろう。

しかし、ルークはそれをしない。

「・・・どうして？」

「俺は得体の知れない力を頼らなければならぬほど弱くねえ。

——欲しいものは自分の力で手に入れてみせる」

もう寝ろとも言いたげに、ネネの頭の上に乗ったルークの大きな手。その手の重みと温もりを感じて、ネネはゆっくりと瞼を下ろした。

「でも・・・嬉しい・・・。

力を求められなかったのは初めてだから・・・」

魔術を使うことのできるネネは、ずっとずっと“魔女”という役目を求められてきた。

師匠には魔術の上達を求められ、病人には薬を求められ、国には魔女としての存在を求められ・・・。

誰かに必要とされるのは幸せなことかもしれないが、必要とされているのは魔女であって“ネネ自身”ではない。

ネネは自分の存在意義を気にするような性質ではないが、それでも初めて力を求めなかったルークの存在が嬉しかった。

そう、彼は最初からネネを魔女として扱っていなかったのだ。

すれ違ったネネを突き飛ばし、すり寄って来るネネを拒んだ。

「“こんな風に”生まれたこと、後悔はしてません・・・でも、できるなら・・・」

もっと欲しいものがある。

魔女としての膨大な力と権力よりも、もっと喉から手が出る欲しい

ものが。

「・・・生まれや存在を超越したものが欲しい」

魔女としての運命を逆らって、魔女では絶対に手に入らないものが欲しい。

それを人は欲張りだと言いかもしれないが、素直なネネの本心だ。

ルークは何も答えず赤い瞳で見下ろしていたが、やがてゆっくりと口を開いた。

「気味悪い薬やペットはそのためか」

「いえ、あれは趣味です」

今までの眠たそうな声色が嘘だったかのようにきっぱりと答えたネネ。

ルークは目を細めてネネの頭の上に置いていた手に力を加えた。

「うー・・・重い・・・」

「お前の仏頂面にも大分慣れたな・・・」

最初こそ人形のように気味が悪かったネネの無表情も、ずっとネネに付き纏われて一緒に居たため慣れてしまったようだ。

しかしやはりネネの表情が崩れたところが見てみたいルークは、ネネを見つめながら少し考え込む。

じっと見つめられたネネは首を傾げた。

「・・・なんでしょう?」

「いや、・・・早く放せ」

ずっと掴まれていたままの袖を振り払おうとしたが、未だにネネの手はしっかりと握りしめている。ネネは放せばルークが行ってしまうことがわかっていたため、てこでも放そうとしない。

「・・・嫌です」

「放せ」

「嫌」

いつもの言い合いが始まってしまい、ルークは盛大な溜息を吐く。ネネはピコンツと何やら名案が浮かんだらしく、袖をひっぱりながら少し早口で提案する。

「じゃあキスしてくださったら放してあげます」

「・・・はっ」

乾いたルークの笑い。

「してくださいなら放しません。死んでも放しません」

ネネの決意は固く、ルークは仕方なくネネのピンク色の唇に自分の唇を押し当てた。

「きつ……」

き？

ネネから奇声が聞こえ、ルークは怪訝な顔をしてネネを見下ろす。
ネネは大きな目を見開き、自分の口を両手で押さえるとものすごい
速さで反対側の壁まで後退った。

だんだん真白だった顔が赤く染まっていくのがわかり、ルークは嘔
き出して笑いを噛みしめる。

あのネネが顔を赤くして照れている。何を言っても何をしても無表
情で、鬱陶しいほどに積極的なあのネネが。自分から服を脱ごうと
したり平気で誘ったりするあのネネが、たかが触れ合うだけのキス
で顔を赤くして動揺している。

「くっ……」

さらに笑われたのが恥ずかしかったのか、可哀そうなくらいに真っ
赤になったネネ。

そして――逃げた。

普段あれだけ積極的なのに受け身になると恥ずかしがり。
ルークは笑いが止まらず、しばらく小屋に押し殺したような笑い声
が響いた。

8話 手に負えない捕虜

ネネは顔の熱を冷まそうと夜の街を彷徨っていたら……敵に捕まった。

敵達は額に脂汗をかきながらも、見事に捕えた魔女に歓喜する。

「やったつす！きつとアニキも喜ぶぜ！
これはいいい取引の材料になる！」

「本当にこんな“ちんまい”のが赤獅子の女あ？間違えじゃねえのか？」

「間違いないない。
水色の長髪と黄土色の瞳……これが荒廃の魔女の弟子ネネだ。あんまりいい噂は聞かないがな」

「魔女つたらそれだけで傍に置く価値がある。
こんなんでも赤獅子にとつては大切に違いねえさ」

ネネは抵抗するのも面倒なので黙って聞いていたが、散々な言われようである。

男だらけのむさ苦しい敵のアジトは、非常に簡易な造りの小屋。冬には隙間風が入ってきくるほどボロボロなところだった。

彼らがルークの敵であり、ネネを利用してルークを陥れようとして

いるのは明白だ。

ネネはさっさとこんな場所から出ていきたかったが、抵抗するのが非常に面倒だという理由で動こうともしない。

「どうするよ、これ」

「とりあえず手足を縛ろう。魔術とやらを使われたら面倒だ。傷つけるなよ、国に殺されるぞ」

魔女を傷つけたら死刑。

その恐怖に男達は喉を鳴らし、ロープを持ったまま突っ立っているネネを見た。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「やっぱり無理だつて！！なんか睨んでる！！こっちめっちゃ見てる！！」

見られているだけでも妙な威圧感を感じた男の一人が根を上げる。持っていたロープを他の男に無理やり渡したが、その男も嫌だったらしく別の男にロープを無理やり押し付けた。

順にぐるぐる回って行くロープをよそにネネは放っておかれている。

「お前がやれよ！」

「やだよ！お前がやれよ！」

「……」

暇すぎて言葉も出ないネネ。

そう言えば眠いなあと欠伸をしながらロープの行方を見守った。

最後に回って来たらしい男は、この中では下っ端なのか、他の者に押しつけることができずにおろおろと狼狽している。

「え……ええ……僕がやるんですか？」

「ほら、行けよ！」

ドンツと背中を押され、彼は深く息をして覚悟を決めるとロープを強く握りしめてネネを見つめた。

じりじりと慎重に近寄って行き、ネネの腕を掴もうとしたところで事件が起きる。

掴まれそうになった左腕の袖から蛇が顔を出し、近寄って来た彼の腕を舌でチロリと舐めたからだ。
生ぬるいヌルツとした感触に彼は飛びあがる。

「ひひひひひひ！！」

「おい！どうした！」

「だめだ、こいつ泡吹いてる……」

「クソッ！やはり魔術か！」

「魔女……なんて恐ろしい……」

男たちは勝手に魔術だと勘違いしているが、ただペットの蛇が少し舐めただけ。それでも随分と驚いたらしい可哀そうな彼は、ひっくり返って意識を失ったまま泡を吹いていた。

「一体こいつに何をした!？」

気迫のある声で問われ、親切にもネネは答える。

「・・・私じゃない。バートリちゃん・・・」

ほら、と服の中に手を突っ込んで取り出した蛇に絶叫する一部の男達。

「ぎゃああああ!!ヘビーーーー!!!!」

「やめろ!!こっちに向けるなよ!!!!」

一方で冷静な男達は冷めた目で慌てふためく仲間を見遣る。たかが蛇ごときでスラムの不良が驚いてどうする、と。

「落ち着け・・・」

おい、お前」

話しかけられたネネは別の男の方へと振り向く。

「・・・なにか？」

「ここに連れてこられた理由はわかってるだろう。大人しく従う気がないなら魔女でも容赦はしない。」

俺達はスラムの不良なんだ」

国など恐れない、そう言った男はしっかりとネネの目を見据えた。彼の言葉で目が覚めたのか、他の男達も顔つきをしっかりと変えてネネと対峙する。

「・・・では私は何をすればいいの？」

「大人しくしている。」

もうすぐアニキがこちらにいらっしやる。時期に命が下りるだろう」

アニキとは彼らの親分のことらしい。

手下たちの人数や性質から、どうやら大した組織ではなさそうだ。

ネネは眠気から目をコスコスと擦りながらその場に座り込む。

「おい、大人しくなつたぞ・・・」

「何考えてやがるんだ」

黙って従うネネに様々な憶測が飛び交うが、本人が一番何も考えていないことに気付かない敵達。

しばらくすると、彼らの親分と思われる人が小屋へ入って来る。

「こいつが例の魔女か」

「へい！間違いありません」

真っ黒の髪に真っ黒の瞳。容姿は案外どこにでもいそうな感じで普通だった。ルークと比べたら月とすっぽんだなあ、などとネネは失

礼なことを思いながら彼を見上げる。

彼は値踏みするかのようにネネの頭上からつま先まで見回した。

「ふーん・・・魔女ねえ・・・」

お前、魔術が使えるのか」

「ええ、もちろん」

「じゃあ今ここでやってみせろ」

まるで曲芸扱いの命令。しかしネネはあっさりと承諾する。

「何でも構わないなら・・・」

「ああ、いいさ」

「・・・じゃあ鍋と火を用意して」

わざわざ敵の目前で披露してくれるらしいネネに、未知の魔術を間近で見られる敵達は緊張を高めていく。

手下が用意した簡素な鉄鍋を火にかけると、ネネは近くにあった飲み水を鍋の中に少量流し入れた。

「鳥の目玉と」

服の中から取り出した小瓶に詰まった目玉。それをひとつだけ鍋の中に放り込む。

いきなりのグロテスクな光景に先ほどの期待は一気に打ち砕か

れ、引きつった表情になる一行。

鍋に入っている水分と一体になった目玉は、とろんと溶け出して水となり始めた。

「蛙の足と・・・」

別の場所から取り出した小瓶から、蛙の足と思わしき物体が鍋の中へ。

「蜘蛛の内臓と・・・」

別の場所から取り出した小瓶の材料が加わる。

「ヒルの皮と・・・」

別の場所から——（以下省略）

後ろから「おえっ」と吐き気を催す音が聞こえたが、ネネはお構いなしに続けようとしたところで、とうとうストップがかかる。

「おい！これが本当に魔術なのか！？」

敵の親分はお怒りの様子だ。

ネネは小首を傾げる。

「なんでもいって言ったじゃない・・・」

言った。確かに言った。

しかし想像の斜め上を行ったネネの行動で、彼女が鍋へ材料を入れるたびに敵達の顔色が悪くなっていく。

「こんなの魔術じゃねえ！」

「えええええ……」

「えええ、じゃない！何を作ってるんだ！」

「何って……」

ネネはぐつぐつと煮えたぎり始めた地獄鍋をチラミし、視線を元に戻す。

「……なんだろう」

「ボソツって言ってもダメだからな！ちゃんと聞こえたからな！」
自分でも何を作っているのかわからなかったらしいネネ。

「たぶん……自白剂的な……」

「もういい！魔術はいいから！
てめえは赤獅子との取引材料にする！」

てめえら、こいつを縛れ！と命令が飛んだ。
もう気味の悪い魔術を見なくなかった手下たちは、慌ててロープを片手にネネに近寄る。

——しかし……

「ぎゃあああああ！！なんかきたああああ！！」

「蛇！？いや蜘蛛だ！！」

「げっ！こいつ蛇以外にも服の中に詰めてやがったのか！！」

手下の1人の腕に飛び移った一匹の蜘蛛。

手のひらサイズのたかが蜘蛛一匹に、敵達はこれまでにないほどのパニックに陥った。

「ぎゃあああ！！とつて！！とつて！！」

「あ！逃げたぞ！！」

「ひひひひひひ！！」

ぴよんぴよんと飛び回り逃げる蜘蛛。それを追いかける男達。

別の男の服の中に蜘蛛が入り込んだとき、一番大きな悲鳴がボロ小屋に響き渡る。

「きゃああああああ！！」

「落ち着け！今捕まえっから！」

上の服を脱がせて取り出す作戦のようだ。1人に男達が集って上着を引っ張り合う。

「ったく、たかが蜘蛛一匹で騒ぐんじゃねえ」

うるせえぞ、と親分。

彼が苛立ち始めたのを感じ取った手下は、さらに慌てて蜘蛛を捕まえようと躍起になる。
しかしいとも簡単に男達の手をすり抜けた蜘蛛は別の場所に飛び移った。

――親分の顔の上に。

突如目の前に現れた八本足。細かい毛までしっかりと見え、さらに蜘蛛のきよろつとした目と親分の目が合った。なんとも言い難い嫌悪感とシヨックに見舞われる。

ふつと倒れる大きな身体。

「あああああ！！アニキiiiiiii！！」

「アニキを気絶させちまうなんて！！」

「なんて魔女だ！！」

彼を気絶させたのはネネではなく蜘蛛である。

それでも自分たちの崇拜する親分が倒されてしまい、彼らはネネの魔術を見たとき以上に真っ青になった。

ネネは欠伸をしながらも器用に話す。

「……帰っていい？」

「「「帰ってくれ！！」」」

土下座された。

9話 ルークを捜せ

敵の捕虜となるも見事に自力で抜け出し生還を果たしたネネ。

言い方は非常にカッコイイが、実際はかなり大変であった。主に敵の方が。

ふらふらと眠気を堪えながら彷徨う夜のスラム。街灯すらない暗闇に包まれたそこは、夏を知らせる熱気と錆びれたような寒気を感じる風が共存している。

暑いのに虚しい、そんな光景だった。

「・・・・どっちだったっけ・・・」

早く眠りたいのにルークの潜伏しているアジトの方角がわからなくなつたネネ。

いつそのまま道で寝てしまおうか、などと考えていると、遅い腕が倒れそうなネネの身体を支えた。

「・・・・おい」

「・・・・？」

ネネを支えているのはルークじゃない。

彼女は身体を斜めにしたまま、自分を片手だけで支えている失礼な男の顔を見上げた。

黒髪に黒茶色の鋭い目。ルークの右腕であるジェルダだ。

ずいぶん懐かしい顔である。

「・・・・・・・・おひさ」

「他に言うことはないのか？」

相変わらずネネに手厳しい彼は額に青筋を浮かべる。そしてぞんざいな言い方で訊ねた。

「ルーク様はどこだ、案内しろ」

「・・・・・・・・眠い」

「寝るな！案内するまで寝るな！！」

眠気は最高潮に達している。

娯館の爆発後から敵に捕まっている間まで、ネネはずっと眠たかったのだから。

「・・・・・・・・おやすみなさい」

ネネは未だ叫び続けるジェルダの声を無視し、目を閉じて眠りについた。

むくりと起き上がったネネは目を擦りながら目の前の人物を見た。

「やっと起きたか・・・」

「・・・ジェルダさん・・・おは・・・」

「おは、じゃない。貴様何時間寝たと思ってるんだ」

夜の道端で遭遇し、そのまま寝てしまったネネを自分の潜伏しているアジトに連れて来たジェルダ。

ネネを助けようとしての行動ではなく、あくまでルークの居場所を知るためである。

しかし・・・

「さあ、ルーク様のところまで案内しろ」

「覚えてない」

ネネは場所を覚えていなかった。

ジェルダは一瞬固まり、頭の中を真っ白にする。

「なんだと・・・？」

「最初は・・・ルージュラの娼館にいたの。

ただど住めなくなっちゃって移動したから・・・たぶんその近くだ
と思う」

自分が娼館を爆破したくだりは見事に省略して説明した。

「どんな場所かも覚えてないのか？」

「・・・普通の民家。たぶん、手下の人の・・・。

他の手下の人たちが貴方を探してるから、その人たちを見つけた方
が早いかも・・・。」

そうか、とジェルダは顎に手を当てて考え込む。

ネネが帰り方を忘れたのは誤算だったが、ある程度の情報が得られ
ただけでも助け甲斐があったというもの。

「ルージュラの娼館の近く、か。

ここから少し離れてるな・・・。」

「・・・おやすみなさい」

「おい、待てっ」

ジェルダはちゃっかり眠りに就こうとしているネネの頭を片手で掴
み制止した。

「もう十分に寝ただろうが。
まだ寝る気か」

「・・・だって、疲れたんだもん。敵に捕まってて・・・」

「何！？敵に!？」

驚いたジェルダは細めの目を見開き、彼にこくりと頷くネネ。
興奮しているジェルダはネネの華奢な肩を掴んで詰め寄る。

「敵とはロドスのことか!？」

「たぶん、違う。」

なんかうるさい人達だった・・・」

「うるさい？」

「そう、絶叫が・・・あちこちから・・・」

「お前、何したんだ・・・」

疑うような呆れたような目でネネを見るジェルダ。敵地で何が起こったか想像つかないこともないが、想像すると気分が悪くなってきたので止めた。

「ロドスじゃないなら問題ない・・・。
それよりルーク様との連絡だ」

「・・・魔術を使いましょうか？」

「いや、それは止める」

「何故？」

ネネに問われてジェルダは言葉を詰まらせる。まさかルークからネネに魔術を使わせないよう忠告を受けているなどと言い出せずに――。

「おい、ジェルダ。アレに魔術は使わせるな」

「はっ……はい？」

まだネネが付き纏い始めて間もない頃、突然の主の命令にジェルダは目を点にして聞き返した。

「ええと、それはどういう……」

「だから、アレに魔術を使わせるな、と言っている」

アレとはもちろんルークのストーカーである魔女ネネで間違いないだろう。

ジェルダはルークの意図が読めず混乱する。

「何故かお聞きしても?」

「余計な真似はさせたくない。
アレが国の回し者だとも限らない」

「だったら最初から引き離せば?・・・!!」

ぜひそうして欲しいとジェルダは声を大きくして言うがルークは首を横に振った。

「そうじゃねえ、あくまで可能性の話だ。ただ余計なことをさせないように念を押すだけ。」

俺のスラム統一に魔女の力はいらない」

自分の力だけで成してみせる、そう断言したルークにジェルダは身体を震わせる。

この圧倒的な自信、そして実力。彼の言う言葉は虚言でも妄言でもない、真実だとジェルダは確信していた。

ルークなら、己の力でスラム統一を果たすことができるだろう、と。

「それに、万が一のことがあればアレも困るだろうが」

「困る?」

「魔女は国に仕える生き物だ」

そこでジェルダははっとした。

そう、魔女とはドローシャ王国のみに仕える生き物。もしスラムの不良に執着し、その力を使っているなどと国に知られたらネネの立

場が危ない。

神から与えられた神聖な力が、人殺しなどの為に使えば何と言われるか。

奥歯を噛みしめて眉間の皺を深くするジェルダ。未だネネが傍にいないことすら納得できないと言つのに、ルークはネネの将来を案じている――。

「とにかく、魔術を使うのはダメだ」

ネネは小首を傾げながらも、特に魔術を使わなければならない状況でもないので承諾した。

ジェルダは大きく息を吐いて立ち上がる。

「ルージュラの娼館の近くを風漬しに探せば見つかるだろう。あの周辺で手下の家はそんなに多くない」

「・・・わかった。お腹すいた」

「なんて緊張感のない・・・」

ネネのマイペースに怒りを通り越して呆れ返るジェルダ。テーブルの上にあるバスケットごとネネに投げ渡すと、彼女はそれを見事に

キャッチして一番上のパンに噛り付いた。

硬いけれどそれなりに美味しいと、ネネは小さな口であっという間に平らげる。

「大人しくしている、いいな？」

「・・・わかった」

ネネを一人にするとロクな事になりそうにないと心配が募るが、ずっと一緒に居るわけにもいかない。

ジェルダは何度か後ろを振り返りながら、ルークを探すために部屋から出て行ったのだった。

キスした途端にゆでダコのようになって逃げたネネはそれっきり帰らず・・・。

紛れもなく行方不明になったネネに、ルークのみならずルージュラからも頭を抱える。

「つたく、手のかかる・・・」

「同感だよ。」

ジェルダの旦那を探すだけでも大変だったのに」

ネネがいないと静かで平和だが、ずっと纏わりついていたものが急に亡くなって違和感を覚えるのも事実。一番大変な時に厄介事を次々と起こされ、ルージュラは参っていた。

「まあ、心配しなくても魔女なんだから1人でも問題ないだろ。そのうちひょっこり現れるさ、あの子なら。」

敵に捕まるなんて面倒なことになってないといいけどねえ」

「・・・」

ルークは無言で酒を煽る。

空になった杯には横に居る女がすぐに継ぎ足し、再び並々と注がれる。

「それで、ジェルダの旦那が見つかったらどうするつもりだい？」

「・・・いつも通りだ」

今まで通りにスラムの統一を目指し敵を斬る、それだけ。
ルークは杯の酒に映る歪んだ自分の姿を見ながら続けた。

「手下が集まり次第ロドス組を襲撃する」

ルークが得意としている1対1の勝負。ノロゾイともその勝負で勝ったのだ。

例え大人数と戦ってもルークの力は遺憾なく発揮できるが、サシの勝負では純粹な実力勝負となるため、剣で右に出る者はいないルークの方が分がある。

できればロドスとの抗争も、リーダー同士の一騎打ちに持ち込みたかった。

しかしルージュラは心配そうに助言する。

「けどねえ、ノロゾイの残党もいるし、新興勢力も台頭してきてるし、今は勢力図の変化が激しいんだ。

情報不足のまま下手に動けば逆に窮地に追い込まれるよ?」

「情報に踊らされるよりはマシだ」

いかにもルークらしい考えだと苦笑するルージュラ。

決して彼は情報を疎かにしているわけではないが、情報によりも勘を頼っている。まるで野生の獣のごとく敵の出方や作戦を嗅ぎ分けるそれは、おそらく生まれつきの才能を持ったルークにしかできない芸当だった。

「じゃあ、あたしらは仕事に戻るから、何かあったら娼館に来てお

くれ。

それから天井の修復、頼んだよ」

「ああ」

だんだん陽が沈み始めた夕暮れ。

ルージュラは他の女たちを引きつれて静かにアジトを後にした。

10話 再会へ

次の日になると、昨日まで居なかった手下たちがジェルダの潜伏先に現れた。この調子だとルークの居場所が分かるのも時間の問題だ。

夏の日照りの中で必死に情報を集める手下達の一方、ネネはアジトの備蓄を喰い漁りながらのんびりと暮している。

はつきり言って邪魔であったが、そんなことを本人に言えるツワモノはジェルダ以外いなかった。

「働かざる者食うべからず！」

ジェルダに果物を取り上げられたネネは恨めしそうに視線だけで訴えるが、彼は相手にせず取り上げた果物を仕舞いこむ。

「・・・食べてないとやってられない・・・。
ただでさえルーク様に3日も会えてないのに・・・」

ルーク欠乏症に陥ったネネは食に走ったらしい。

大人の約3倍の量をペロリと平らげているネネ。その上彼女のペットの餌も必要とあつては、アジトの備蓄が無くなるのも早い。もちろん無くなった食料を求めて走り回るのは手下達である。

ジェルダは震える拳を握った。

「お前がさっさとアジトの場所を思い出せばすぐに会えるのだがな」

「ジェルダ様、よろしいでしょうか」

「すぐに行く」

部屋へ入って来た手下に呼ばれて出て行ったジェルダ。

入れ替わりにひと仕事終えた別の手下たちがわらわらと帰って来た。

「今回もハズレかあ」

「あとはミューとボンドのところだけだな・・・。
今日中に見つかるだろ」

「ルーク様、無事だといんだけど。
あ、嬢ちゃん・・・いたのか」

イスにぽつりと座っているネネに気づいた彼らは疲れた様子で空いているイスに座る。

疲れているのか、腰を下ろすなりすぐに突っ伏した。

「・・・まだ見つからないの？」

「ああ、でも後2軒だけだ」

「きつとすぐに見つかる。」

今他の奴らが向かってるからな」

それを聞いて安心したネネ。

ルークにもうすぐ会えるとなると心が高揚してきたのか、足をブラブラさせて無表情ながらに頬を染め喜んでいる様子。

「しかしそれにしても今日はあつちーな」

パタパタと手を仰ぎながら顔を歪める男の言う通り、今日は久しぶりの快晴で気温が高い。夏がいよいよ始まったことを知らせる湿り気の多い風も吹いている。

じりじりと焼けるような日差しと、噴き出てくる汗は毎年ながら不快だ。

ドローシヤは気候が穏やかであるが、スラムは平地のため気候には若干恵まれていない。必然的に作物の育ちも悪く、総じてスラムは慢性的な食糧不足でもある。

「おい、お前ら武器をとれ」

声が聞こえた扉の方へ向けば、そこにはジェルダの姿。彼の険しい顔つきから、一同は無防備に休めていた身体を強張らせた。

緊張が走るなか、ネネは小首を傾げる。

「・・・何かあったの？」

「ルーク様の居場所が特定できた・・・が、襲撃を受けている」

ジェルダが居ない状況下でルーク達が襲撃を受けているらしい。すぐに援護に向かわねばと、一同は部屋中を縦横無尽に駆け回る。

「ルーク様は、・・・無事？」

「当然だ。」

お前は邪魔だからここで大人しくしてろ」

「・・・ついていく」

ネネは少し考えてから口を開く。
当然ジェルダはいい顔をしない。

「足手まといになるのがわからないのか？」

「・・・でも」

ネネは不満げに濁しながら俯いた。
戦力の欠片にもならないネネだがやっとルークに会えるチャンスに
無駄にしたくはない。

「これ以上あの御方の邪魔をするようならこの俺がお前を叩き切る。
わかったなら大人しくしている」

凄むジェルダに押されてネネはしぶしぶ頷いた。
しかしやはり不満だったのか大きく膨らむネネの頬。無表情のまま
頬だけ膨らんでいるその姿は、まるで頬一杯に餌を詰め込んでいる
ハムスターの様。

「ジェルダ様、準備が整いました・・・けど・・・」

手下たちは何とも言えない表情でネネとジェルダを交互に見、控え
めに声をかける。

「すぐに行く」

「・・・」

颯爽とマントを翻して去っていくジェルダと、その背中を恨めしげに見やるネネ。

男たちが出ていくとあれだけ騒がしかった部屋も静かになり、ネネは一人、今頃ルークのもとへ向かっているだろうジェルダを思っため息を吐いた。

「本当によかったんですかねえ、嬢ちゃん置いてきて・・・」

加勢に向かいながらそんなことを漏らす手下。ジェルダは苦々しげに顔を歪めてその手下を睨んだ。

「当然だ。

そもそもあんな得体のしれない物体がルーク様の傍にいただけでも忌々しき事態だというのに……これ以上邪魔されて堪えるものか」

考えてみれば出会いから今まで、ネネの所為で巻き込まれた事件は数知れず。被害者も相当数いる。

ジェルダにはネネの存在が百害あつて一利なしとしか思えない。

実際に、今の所はその通りであつた。

「でも、嬢ちゃん一途だし。

なんていうか……応援したくなるんですよ」

「そうそう。あんな細っこい小さな体でいつもルーク様のために一生懸命でさ。

好きな男のためにこんな物騒な所に飛び込んでくるなんて、まだ幼いくせに肝っ玉座ってるよなあ」

「なんだかんだで憎めないですよね」

口々にネネのことを褒める男たちに、ジェルダの血管が音を立ててブチ切れた。

「うるせえ!!!」

ルーク様に魔女など相応しくない!!!論外だ!!!」

あまりの怒り様に動揺が走る。

何故ここまでネネを毛嫌いするのだろうか、と。

「で……でも、恋愛なんて本人にしかわからないもんだし……」

「そうですよ、趣味なんて多種多様・・・」

「貴様ら、どっちの味方なんだ！？ああ！？」

フォローが気に入らなかったジェルダに凄まじく萎縮する手下たち。気まずい空気が漂う中で誰もが沈黙しているうちに、ルークの一行と合流を果たすことができた。

敵の数はそれほど多くない。今の人数ならば簡単に撤退に追い込むことができるだろう。

ルークの姿を見つけたジェルダはほっと肩を撫で下ろし、彼に近づく。

「ルーク様、ご無事で」

「あいつはどうした、一緒じゃないのか」

一言目にネネの話題が出てきて、ムツとジェルダは眉間に皺を寄せた。

「置いてまいりました。戦闘の邪魔になつてはと思い・・・」

「バカが。なんで連れてこねえんだ」

「・・・っ！必要ないでしょう！！あんな何も役に立たぬ魔女など！！」

「そういう問題じゃねえ」

何故ネネが皆に庇われるのか。何故自分が責められなければならないのか。

ルークの右腕としてずっと彼を支え守ってきた自分よりも、突如現れた小娘を大切にするなど理解できない。

佳境に入る前にルークの味方が増え、劣勢になったと悟った敵はさっさと退散してしまった。あっけなく逃げた敵を情けないと思いつつも手下たちは笑みを漏らす。

「これで嬢ちゃん迎えに行けますね」

「喜ぶだろうなあ。ずっとルーク様に会いたがってたしな」

戦いが終わったかと思えばまたネネの話題。

ジェルダは痛いほどに唇を噛みしめ、血に染まった刀身を睨んだ。

11話 妄想話

出会った2人は何も言葉を発しなかった。
ただネネの頭の上に置かれた大きな手は、優しく、温かいものだった。

「・・・どこに行ってたんだ」

口火を切ったのはルーク。静まり返った小さな部屋の中、ネネは無表情のまま俯いて返事をする。

「すこし・・・遠出を」

「長かったな」

「・・・はい・・・とても・・・長かったです」

たった数日が異様に長く感じられたのは、一緒に居るのが当たり前になつていた証拠。お互いに忙しかったにも関わらず、隣に居ない空虚さを感じていた。だからこそ再会できた、たったそれだけのことで気持が高揚するのだろう。

ネネはそう思い、ざわつく胸を押さえて目を細める。

ルークはネネを見下ろす形で、再び静かに口を開いた。
チラリと口ウソクの火が揺れる。

「俺はスラム統一を果たす」

「……はい」

「意味のないことに思えるかもしれないが、スラムの長い歴史の中で誰も果たせなかった野望だ。だからこそ果たすことに価値がある」

勝つこと。それは生き抜くための本能。

ネネはルークを見上げて小さく首を縦に振る。

「果たした後になくなるかはわからねえ。国が動き出す可能性もある。」

だから俺は世界で最も強大な国を敵に回す覚悟がある」

「私は……」

「それがお前にはできない」

魔女、という存在。神の子といわれる特殊な力を持った女。

彼女たちはドローシャの王の命に逆らうことはできない。それは掟ではなく、魔女の本能としての絶対的なものだった。

ルークがドローシャの敵となれば、すなわち、ネネの敵となる。

「スラム内のことであれば国が干渉してくることはないだろう。統一した後、俺はこの国をどうこうする気はねえからな。統

だが、万一の時もある。

その時に立場を危うくするのはお前自身だ」

「わかっています……それでも構いません」

「火あぶりになっても知らねえぞ」

「それはとても興味があります」

「火あぶりに興味を示すな」

ネネは深く息を吐いてから、しっかりとした口調で話を続ける。

「わかっています……。でも構いませんよ。」

今一緒に居られるならそれでいいんです。

離れなければならぬその時まで、傍に置いてください」

ゆつくりと琥珀色と赤色の視線が交わると、慌ててネネは顔を反らした。

ルークがクスリと笑うとそれが色っぽいやら恥ずかしいやらで、ネネは耳まで真っ赤になり顔を手の平で覆う。

「なら、その照れ癖をなんとかするんだな」

「……はい」

「まったく、前はくつついたり服を脱いだり平然としてたじゃねえか」

「……どうせ相手にされないだろうと思って全然期待してませんでした……」

「アホか」

「……すいません」

「早く直さねえと先に進めねえぞ」

「・・・はい」

ネネは指の隙間からチラリとルークの顔を覗き見たが、思ったよりも顔が近付いていて小さな悲鳴を上げる。
その様子が可笑しくてルークが吹き出し、ネネは収まりかけていた顔の熱が一気に戻ってしまったのだった。

ネネがルークと再会を果たしてからというもの、彼女はずっとルー

クの傍に張り付いて離れなかった。まるで金魚のフンの如く、何処へいってもルークに付いて回るネネの姿。

それを見守っている手下たちは、温かいまなざしを向けていた。ルークがネネを邪険にしないというところが、なんとなく彼らの心をくすぐったくさせる。

さらに大きな変化がもう一つ。

ルークに触られただけで真っ赤になるのだ。正確には、ルークから積極的な接触があった時。

昨晚の膝の上に乗せられた時なんかは、顔から湯気が上りそうなほどだった。

「『『カワイイ』!!』」

昨晚の様子を思い出した一同は手をぶんぶん振ったり床を叩いたりして激しく悶える。

「っはー！なんだこの言い表しようなない高揚感は！」

「この世にあんな可愛い生きものがあっていいのか？」

「あの頃の積極的な嬢ちゃんがウソのようだ・・・」

「まさに形勢逆転だな！」

実は恥ずかしがり屋だったネネの話題を肴にすると酒が異様なペースで進む。それほどにルークのネネのやりとりは彼らにとって面白いことこの上なかった。

さらにルークらの戦力が回復し始めたこともあって、皆の機嫌がよ

いのだ。

「だが、仲睦まじいシーンは端から見れば多少犯罪臭いがな」

「あの体格差は確かに卑猥だ」

ルークはスラムを生き抜くだけあってかなり良い体格をしている。対照的にまだ身体の成長が止まる25歳に満たないらしいネネは、顔立ちもどこか幼さが残っており、身体も細く小さい。

その2人が寄り添う姿は、第三者に良からぬ想像をさせるものだった。

「嬢ちゃんの身体が心配だなあ」

「うちの頭、デカいからな」

「絶対ドSだし」

「嬢ちゃんは健気だから献身的に尽くしてるんじゃないか？」

「ルーク様のために我慢して毎晩毎晩・・・泣かせるねえ」

下品な会話にげへげへと厭らしい笑いは止まらず、だんだん会話がヒートアップしていく。

——ところが。

「・・・猥談？」

「「「ぎゃあああああー!」「」」

神出鬼没なネネの心臓に悪い登場に驚きの声を上げる一同。
情けない叫び声を上げた彼らは、心臓をバクバク言わせながら大きく息を吐いた。

「お、驚いた」

「魔女ってそんなに突然現れるものなのか？」

「頼むから気配消したまま近づかないでくれ……。心臓にが止まるかと思っただぞ」

口々に文句を言う手下たちに、ネネは小首を傾げる。

「驚いたら心臓が止まるの……？」

「まあ……。ショック死する奴も中にはいるだろうよ」

「……なるほど」

「試したいなら他の所でやってくれな？」

実験台にされるのは勘弁だとひきつった笑いをしながら頼む。ネネならば自分たちで試しかねない、と。

ネネは無表情ながら少し不満そうに唇を歪め、こくりと頷いた。

「ところで、ルーク様はどうした？」

「……武器商人と商談中」

「そうか、いいいよか……」

感慨深げに遠い目をして漏れるため息。

力を蓄えるために戦闘を禁止されていたが、やっとともに暴れることができそうだ。溜まりに溜まっていた鬱憤を晴らすと、皆の目に欲望の火が灯る。

ルークがスラムの頂点に立つために倒すべき巨大な敵はたった1人。

「実力ならロドスよりも頭のほうがずっと上だ。

順当に2人が対峙するシチュエーションさえ出来上がれば勝利は間違いないな」

「だが相手は黒鳥だ。そう簡単にはいかねえよ」

「あつたまだけはいらしいんだよなあ。

狡賢さだけで組を作り上げたような奴だからな。戦闘は弱いくせによお」

「ルーク様なら大丈夫さ。あの人は直感派だが頭も回る人だから」

「待ち遠しいな」

「なあ・・・皆はどうするよ、頭が統一したら」

ルークがスラムの頂点に立った時のことを考える一同。欲望に塗れた妄想に、だらしくも口が半開きになったりニヤ付いたりしている。

「威張り散らしながらスラムを歩き回ってやるぜ」

「そりゃあ、うまい酒たらふく飲んで女侍らせて」

「女にモテるようになるかな」

「当たり前えだ。ルーク様なんか女まみれでウハウハ・・・あ」

口髭を生やした男はネネの存在を思い出して慌てて口をつぐむ。隣にいた男がバカヤロウと肘で彼を突いた。

無表情のためネネの感情は読み取れないが、一気に気まずい空気が漂う。

「だ、大丈夫大丈夫。」

ルーク様は魔女さん一筋だつて！」

「そうそう！あの人は女より喧嘩、って感じだしな！」

「きつと一途に違いねえ！」

「嬢ちゃんがいるんだ、浮気なんかしないさ！絶対え！」

彼らの精一杯のフォローに、ネネはゆつくりと口を開いた。

「・・・いい、別に。私が勝手に好きなだけ・・・」

その言葉で滝のような涙を流し感動する男たち。ネネは若干面倒くさそうな顔をしている。

「なんて健気なんだ!!」

「こないいい子だったなんて・・・！ゲテモノ好きじゃなければ俺

が嫁に貰ってやったのに!!」

「誰が誰の嫁、だと？」

聞き慣れた声が聞こえ、空気がピシリと音を立てた。ギギギと音がしそうなほどぎこちなく首を回せば、声の主であり自分たちの主である人物の姿。

ルークは視線だけで人を殺しそうなほど恐ろしい眼光で睨んでいる。

「こいつを娶るつもりか？」

「い……いえ……冗談で……魔女様を嫁にだなんて……恐れ多い」

ちびりそうなほどガクガク震えながら必死に弁護する男は今にも倒れそうなほど。

「今後自分の発言には気をつけるんだな」

「へい……すみません、頭……すみませ……」

お咎めはなかったものの、結局彼は恐怖のあまり泡を吹いて倒れた。

12話 出陣、そして

時は来た。そう呟いたのは誰だったか。

武器を手にし念入りにチェックをする手下たちは、目を煌々と光らせて笑みを浮かべた。久方の戦闘に胸が高鳴る。

戦力を高めた彼らは今からロドス組との戦闘へ向かう。決着がつけば、これが事実上ルークがスラムを統一するための最後の戦いとなる。

「お前は付いてくるんじゃないぞ」

ルークはネネに向かって何度も念を押した。言い聞かせてはいるが、なんとなく黙って付いて来るような気がしたからだ。

「……はい、大丈夫です」

「どうだか……」

ルークはため息交じりにそう呟く。

戦闘中に急に現れるネネの姿が容易に想像できてしまうから恐ろしい。前科があるからこそなおさら恐ろしい。

「何もせず、じっとして待っている。
必ず迎えに来る、いいな？」

「・・・はい」

ルークは深く頷くと腰に剣を差し、ジェルダの方を向いた。

「日が昇った、出発するぞ。準備は」

「は、滞りなく。敵方のアジトの情報の確認も取れました。

・・・いよいよ、頂点を取る時が来たのですね。貴方ならいつか・・・とは思っていましたが」

当たり前だとルークは不敵に笑い、武器を手に指示を待つ手下たちへ言い放つ。

「てめえら！行くぞ！」

「「「おおおおおおお！！！！」」」

建物がミシミシと音を立てるほどの歓声に押され、ルークは最後の戦いへ向かう一歩を踏み出す。

一度も振り返ることはなかったが、ネネはその背中を見えなくなるまで見送り続けた。

「・・・いつてらっしやい」

ネネは陽が一番高いところまで昇っても、ルークを見送った場所から動かなかった。心配はしていなかった。不安でもなかった。ただ離れているのが嫌で、一緒に居られないことが寂しい。

今朝までは活気づいていたアジトも今は物音ひとつせず、ネネは俯いて目を閉じる。

今頃ルークは剣を振っているだろう。その証拠に、今日のスラムはいつにも増して殺伐としていた。遠くからかすかに聞こえる喧騒に、恐怖を感じた住民たちは家に閉じこもっている。

「こんなところにいたのかい？」

色気のあるアルトの声に振り向けば、そこには懐かしいルージユラの姿。相変わらずの派手な娼婦の恰好は、明るい日差しの中ではとても違和感があった。

「ルークはどこだい」

「・・・もうここには・・・」

彼女は「そうかい」と眉をしかめて呟く。

深刻そうな表情で辺りを見回しながら、ネネの目の前まで近づいて見下ろした。

「噂じゃルークがロドスの首を取りに行っただって言うじゃないか。これが叶えば間違いなくスラムはルークの天下になる。

どうだい？お前の目から見て勝機はあるかい？」

「・・・もちろん」

「あたしもね、ルークが勝つと思うよ。

ただね、戦いつてのは一日二日で終わるもんじゃない。なのにあんなはずーっとここで突っ立ってる気かい？」

「・・・何も手に付かないから」

「気持ちわかるけど、その調子じゃルークが帰って来る前にあんながミイラになっちまってるよ。

戦いに勝って戻って来たつてのに一番にあんたの死体を見せられたんじゃ、ルークも堪ったもんじゃないさ」

ネネは少し考え込んだ後コクリと頷く。ルージュラは紅で赤く塗りつぶした口から大きなため息を吐いた。

「女一人をこんな薄汚いところに置いていくわけにもいかないし、

うちの娼館で保護してやるから付いて来な」

「でも・・・ルーク様はここで待てって・・・」

「そりゃ魔女ちゃんが戦場まで付いて来たり行方不明にならないように言っただのさ。問題ないよ」

強く勧められるも、ネネは首を縦に振ることができず黙りこむ。できることならここでルークの帰りを待っていたかった。

「あーもう、仕方ない子だね!」

痺れを切らしたルージユラは無理やりネネの細い手首を掴んで歩き始めた。ずんずんと引つ張られるネネはされるがままに足をもたつかせながらその場を動きだす。

掴まれている手首が痛い。

「あ・・・あの・・・」

「グズグズ言わない! さっさと歩くんだよ!」

有無を言わず付いて行った先は娼館ではなく、何故か住み慣れた師匠の家だった。ネネはここに連れてこられた意図が分からず、困惑してルージユラの顔を見上げる。

一方ルージユラはきまりが悪そうに顔をしかめて口を開いた。

「悪いね、でもこれもあたしの仕事なんだ。
悪く思わないでくれ」

「遅かったね・・・ネネ」

家の中からは懐かしい老婆の声。ネネは肩を小さく震わせながら、意を決して建付けの悪い扉を開く。

そこには椅子にゆったりと腰かけた師匠の姿があった。

しばらく会っていなかったからだろう、久々に見た師匠の顔には以前にも増して皺ができています。年老いてもうすぐ寿命を迎える証拠だ。

「探していたんだよ、ネネ」

ネネはゆつくりと師匠に歩み寄り、ルージュラは腕を組んで静かに扉に背凭れる。

「・・・なぜ、私を？」

「陛下から招集命令が下されたよ。」

もちろん——ネネも参加しなければならない」

一瞬息を止めてから大きく吐き出すネネ。無表情だが、顔には“面倒くさい”と思いつき描かれていた。

よりにもよってルークの帰りを待っているこの時にしなくても、とネネは心の中で独りごちる。

「・・・どれくらい？すぐに帰ってこられる？」

「わからん・・・が、お前はもうスラムには戻ってはならん」

「え・・・」

黄土色の瞳を大きく開いて師匠を見つめるネネ。言われたことが上手く飲み込めず、ネネはもう一度問うた。

「でも・・・なんで・・・？」

「知らぬが仏——という諺があるだろう？知らないほうが幸せなこともあるんだよ。
とにかく、お前はわたしのヘソクリを返してから今すぐに王城へ向かいなさい」

「・・・やだ、いけない・・・やだ」

ネネは何度も首を横に振る。

ネネには約束があつた。ルークの帰りを待つという約束が。

駄々を捏ね始めたネネに老婆は頭を抱え、困った様子で説得を続ける。

「そう言うとは思つておつたが・・・。
まったく手のかかる弟子だ」

「約束、してるから・・・いけない。絶対にイヤ・・・」

「しかし、陛下直々の命令なのだから断ることはできないんだよ。
何度も言い聞かせただろう？」

魔女は神の子、神の化身とも言われるドローシャ王に逆らうことは不可能」

「・・・」

ネネは軽く唇を噛んで黙り込んだ。普段使わない頭を必死に動かしても、招集から逃れる方法は見つからない。
老婆は大きなため息をつく。

「往生際が悪いね。これは魔女という生き物に生まれた運命。
お前があの男に惚れた時にもちゃんとわたしは忠告したはずだ。やめておけ、と。」

何の覚悟も無しにあの男と一緒に居たわけではなからう。ただ、今その時が来ただけだよ。残念だろうが、ネネはもうスラムに戻ってくることはできん。あの男と会うことはもうないだろう」

ネネはぶんぶんと首を横に振った。

「わからない・・・なんで・・・」

老婆の言うことには多少の矛盾があった。招集がかかっただけなのになぜ引き離されなければならないのか。
もちろん約束を果たしたいネネは招集を受け入れることができない。しかし“もうルークに会えない”という言葉は、もつと受け入れることができない。

知らぬが仏、そのようなありきたりな諺では納得できず、もう一度老婆に訊ねた。

「なぜ・・・今招集がかかったの・・・なぜスラムに戻れないの・・・何のために陛下が私を呼んでるの・・・」

困り果てた老婆は眉を八の字にしてルージュラを目を見合わせる。
2人の無言のアイコンタクトで、今まで静かに見守っていたルージュ

ユラが口を開いた。

「それはとーっても単純な話さ。とーっても、ね。ま、いつかは知らなきゃならないことなんだけどさ、魔女ちゃんには相当シヨックだと思うよ？
それでも全てを聞きたいのかい？」

ネネは無言でコクリと頷く。

ルージユラは小さく頷いてから話し始めた。

「つまりはねルークが《ドロージャの敵》、だということなんだよ。そして今の私たちにとって、最も危惧すべき存在だからだよ」

ネネはわけがわからず小首を傾げる。

ルークはまだスラムの統一を果たしていない。果たしたところで、それは無法地帯のスラム内だから許される行為のはず。わざわざ国王が動く理由にはならないし、ドロージャの敵になる理由にもならない。

ルージユラは続けて口を開く。

「だってあの男は――」

13話 これが運命

「終わったか……」

数回の昼と夜が過ぎ、決着はついた。
ルークは顔に付いた返り血を無造作に手の甲で拭くと、剣を鞘に納めて後ろを振り返る。

「そっちは片付いたのか、ジェルダ」

「……はい。とうとう……やったですね」

ジェルダは夢見心地にそう言っ、て、ルークの足元にある首のない遺体を見遣った。彼は先ほどまでルークとともにスラムのトップに居た存在。しかし今は、ただの動かない死体にすぎない。
そしてルークは頂点まで上り詰めた。長い長いドロージャのスラムの歴史の中で、誰も成し得なかったことをやりとげた。

間違いなく歴史的な瞬間であった。

「たった30年か……短すぎるな」

1万年という寿命の中でルークがスラムに居たのはたったの30年程。それだけで統一を果たせるならば意外と簡単なことだったのかもしれない、ルークは興奮よりもため息が出る思いだ。
しかしジェルダは首を横に振って大声を上げる。

「違います！それはルーク様であつたからこそ！貴方だからこそ30年で統一できたのです！

これは・・・運命に他なりません！貴方の・・・！」

「そんなものに興味はねえよ。さつさと帰るぞ」

「お待ちください！！」

ジェルダは慌てて行き先に立ちほだかり、ルークの額にくつきりと青筋が浮かび上がる。

「てめえ、何の真似だ」

「申し訳ございません、しかしルーク様をあの魔女のもとへ返すわけにはいかないのです」

「切り殺されてえのか？」

ルークはスラリと長い刀身の剣を抜き、ジェルダに切先を向けた。ジェルダは震えながらも意志の強い目でルークを見据え、しっかりと口調で続ける。

「例え殺されたとしても、私は納得いくまでここを退くわけには参りません。

貴方に、ご自分の運命を受け入れていただくまでは。

そのために私は、貴方のそばに仕え、見守り、守ってきた」

「どついう意味だ」

ルークは不快そうに顔をしかめ、ジェルダを睨む。

「どうかご理解いただきたい。貴方が・・・ルーク様が、ドロージャの敵である、ということ。中心の国を倒すことができるのは貴方しかいません。」

——ベルガラ王家の生き残りである、貴方しか——

「・・・敵国の？」

ネネはルージュラの言葉を自分の口で繰り返す。

何故ルークと会うことが許されないのか、その理由が「ルークが敵国王家の生き残りである」ということ。

ルージユラは重い面持ちで深く頷いた。

「そうだよ。30年前に起こったノルディ戦争で滅ぼした敵国王家の生き残りだったのさ。」

寝耳に水ってヤツだよ。まさかこんな近くに敵がいるなんてさ……参ったね」

「わかっただろう、ネネ。お前は最初から叶わない恋をしてたんだよ。」

今は難しいと思うが……早く諦めることだ。受け入れるんだよ、お前の運命を」

「運命……」

ネネはポツリと零すように呟く。

「そう、抗い難いものなのだよ。」

ノルディ戦争は……そりやもう大変な戦争だったよ。ドローシャも手を焼いてね……結局は王妃の手によって終わらされたが」

老婆は思い出しながら話し、ルージユラも肩を竦めて続けた。

「私らはスラムの中にいたからあまり詳しいことは知らないけどさ。敵国の王家は滅ぼしたって聞いてたんだ。だからまさか生き残りがいたなんて思わなかったのさ」

「生き……残り……」

「そう。しぶといね、ベルガラ王家も」

「ベル・・・ガラ・・・」

ネネは半ば呆然として目をパチクリさせた後、鼻で小さく息をして口角を上げた。

「あの人が・・・ベルガラ王家の生き残り・・・ふふっ」

——嗤った、あのネネが。

老婆とルージュラは身震いを起こして自分の腕を抱きしめる。何があっても感情ひとつ見せず無表情を貫き通していたあのネネが、初めて嗤った。

それは喜びからか悲しみからかは分からないものだったが、彼女は確かに、《嗤って》いた。

ルークは眉間に皺を寄せてジェルダを睨み続けていた。面倒極まらないジェルダの告白は信じたくもなかったが、彼はどうやら本気で話しているようだった。

「何を根拠に言っている。俺がベルガラ王家の生き残りだと？ バカじゃねえのか」

「嘘ではありません。」

ドローシャから逃れるために貴方を王城からスラムまでお連れしたのは私です。ルーカス様はまだ幼くて・・・記憶になかったでしょうが・・・。

陛下とは遠縁にあたりますが、間違いなく王家のご出自なのです」

ジェルダは腰を沈め、片膝について頭を垂れる。その姿はまさに主への忠誠を尽くす騎士であつた。

「ずっとこの時を待つておりました。貴方が成長しベルガラの王として相応しい人物になる時を。」

今ベルガラはこの国によつて支配され、管理下に置かれています。ルーカス様はこれからベルガラにお戻りになり、ドローシャを倒すべく御尽力を——」

「アホくせえ」

「ルーカス様！」

ジェルダは咎めるように名を呼ぶが、ルークは半ば呆れたような口調で話す。

「ただ生まれたってだけだろうが。そんな国に愛着も思い入れもねえよ。」

俺はスラムの人間だ、根っからのな。今までも、これからも」

「叶いません・・・それは絶対に。」

ベルガラ王家の血を引く以上、ドロージャは必ずや貴方の命を取りに来るでしょう。

貴方は生まれながらにして中心の国を敵に回す方なのです。もはや運命、どうして逃れられましょう」

ジェルダは力説する。そして彼の言う通り、他に道はないように思われた。

ルークは不機嫌そうに舌打ちをしてジェルダに向けていた剣を納める。

「・・・一度アジトに戻るぞ」

「なりません」

「迎え来ると約束したんだが、俺に約束を違えさせる気が」

「しかし一度戻ってしまえば、あの魔女は無理にでも貴方について来ようとするでしょう。」

まさか魔女にこの国を裏切らせるおつもりですか。それはあまりにも酷というものです」

「だが帰らねえと、ずっと待っているだろうが」

自分を交わした約束を今もネネは守っているはずだ。ここ数日間、戦いへ向かったルークの帰りをずっと独りで待って、そして今も待っている。

もしこのままルークが帰らなければ、一途なネネの性格上、ずっと待ち続けるだろう。たとえ何十年だろうが、何百年だろうが。

ジェルダは声のトーンを落として静かに言う。

「・・・残酷ですがこれが現実。」

目の前で引き離されるよりも、何も知らず待っていたほうがあの魔女にとって幾分かマシなのでは？」

一理ある言葉に、ルークは再び舌打ちをして顔をそらした。

「今すぐに行かなきゃならねえのかよ」

「・・・一刻も早く」

ジェルダは懷に差していた自らの剣を手に取り、それをルークに差し出す。

「これはベルガラ王家よりお預かりしていたものです」

手に持ってみればなんの変哲もない剣。金持ちの持っているような派手な飾りのついた剣ではないが、手に持ったときに奇妙な一体感を感じた。

「ベルガラの国宝でございます、絶対に無くすことのないよう。それから、これも・・・」

今度はシャツの下に巻きつけたベルトから、挟んでいた本を取り出してルークに渡す。ボロボロな上に字が全く読めない、怪しげな本だ。

「それも国宝品でございますので」

「これが？」

疑いの眼差しで眺めるルークとは対照的に、自信満々に頷くジェルダ。

「はい。」

中心の国を倒すためには、絶対に必要不可欠なものでございますよ」

運命が動き始める。

それぞれ、別の方向へと。

14話 旅立ち

ガタゴトと揺れる馬車の中、ネネはぼーっと小窓から景色を眺めていた。スラムにはない山や綺麗な川の水、活気のある商店街にどこも壊れていない民家。雰囲気はもちろん、空気から全く違う。城下町に入るとさらに活気と笑顔に溢れ、この国が世界で最も豊かであると実感できるような場所だった。

「着きましたよ」

ふと視線を上に向ければ大きな城。いつの間にか到着していたらしい。ネネはお金を渡すと大きな荷物を持って馬車を降りた。

冷たい秋風が水色の髪を靡かせる。

「お待ちしておりました、ネネ様」

いきなりネネの周りを取り囲んだのは、かつちりとした分厚い布地の制服を纏った兵士たちだった。紫色の制服を見るに、おそらく王妃軍だろうと推測できる。

「……どこへ行けば？」

「明日謁見の間で陛下と王妃様にお会いしていただきます。それまでは用意した部屋で待機してください」

案内します、と一番偉そうな兵士に先導されネネは歩き始めた。ところが、後ろからボソボソとした話し声がネネの耳まで届く。

「あれが荒廃の魔女の弟子らしい」

「噂のルーカス・ブラッドの恋人って魔女か。」

思ってたのとだいぶ雰囲気違うな、まだ成人してないみたいだ」

「だが顔は確かに可愛いな。俺タイプ」

「色気が足りねえよ。胸もあんまりないみたいだしな、はははっ」

本人たちはネネにわざと聞こえるように話しているのか、一言一句漏らさずばつちりと聞き取れている。気まずい空気が漂い、先導している兵士はゴホンツとわざとらしい咳を漏らした。しかし噂している彼らは平気で話を続ける。

「でも困るよなあ、陛下も。」

まさか魔女が敵に通じるとは、なあ」

「処分するわけにもいかねえさ、一応は神の子なんだから」

「おいおいおい、そこらへんにしとかないとお前らが処分されるぞ」

止めに入ったのはネネでも先導の兵士でもなく、新たに現れた人物だった。場にそぐわない庶民的な服を着た、茶髪青目の綺麗な顔立ちをした男性である。

噂をしていた男たちは彼に気付くと、蛙が潰れたような声を上げて頭を垂れた。容姿や身のこなしから相当身分が高い人物だと思われるが、彼はネネを見てニコリと笑うと気さくに話しかけてくる。

「悪いな、不快な思いをさせてしまつて。本当はそんなに悪い奴らじゃないんだ」

「・・・べつに」

無感情に返すネネに、男性は目を丸くしてから顔を綻ばせて満面の笑みを作る。

「おうおう、噂通りの魔女さんだな！
俺はランス。適当に呼んでくれ」

「じゃあ・・・ランラン」

ブフォツと勢いよく噴き出したのは先導の兵士である。彼はわなわなと口を震わせながら慌てて口を挟む。

「ネネ様！そそそのお方の身分は仮にも殿下でございます！
そのような呼び方は・・・！」

「ランラン・・・別にいいけど・・・ランラン・・・」

どうやらランスと名乗った男は王子殿下だったらしい。ランスは俯いたままブツブツとネネのつけた愛称を繰り返す。

それにしても彼の恰好はとてドローシャの王子とは思えぬほど高級のこの字もなかった。田舎にいても普通に庶民で通りそうなナリだ。変わり者の放蕩王子と言われるのも納得だと、ネネはランスの顔をまじまじと眺める。

「ランラン・・・うーん、可愛いけど女みたいだな・・・」

「・・・そう?」

「よし、じゃあ俺はランランで！
お前の名前は・・・ネネだっけ?」

コクリと無表情のまま頷くネネ。全く感情を見せないネネを不思議に思ったのか、ランスは小首をかしげながら顔を近づけた。

「いや、現物を見るとまた違うもんだな。すげー、違和感。生きものじゃないみたいだ」

先ほど兵士たちの悪口を注意した彼だが、自分の発言も大概失礼である。しかしそれが周りの素直な感想だった。実際に目の前にしてみると、いくら噂を聞いていても違和感を感じる。

まるで人形のような、と。

「ああ、明日父さんたちに会っただろ？
すげー仏頂面でちよつと雰囲気怖いけど。心配しなくても大丈夫、俺も一緒に居るから」

大船に乗ったつもりでいろよ！と胸を叩く頼もしいランス。
なんだかいちいち元気な人だなあ、そういえばお腹すいた、とネネは失礼なことに全く別のことを考えていた。

「魔女の収集かけたがネネが最後だぞ！もう皆帰っちゃった、残念だったなあ」

「……飯おいしいのかな……」

「王城は広いからな、迷子になるなよ！ちなみに俺は今でも迷う！」

「……だんご……たべたい」

テンシヨンの高いランスとは対照的にぼーっとしているネネの噛み合わない会話、それを戦々恐々と見守っている兵士たち。

先導の兵士はその奇妙な空間に耐えられずランスに一礼すると、ネネの首の根っこを掴んで無理やりその場を辞したのだった。

砂を巻き上げる強い風が吹く中、ルークとジェルダはスラムを出た。外から見るスラムは外界から完全に遮断されるが如く、高い壁で囲

われている。

中に居たころはスラムがとても広く感じたが、外から見てみれば所詮国の一角に過ぎないことがよくわかる。

「名残惜しいのですか？」

スラムを見つめるルークに、ジェルダは窺うように質問する。ルークはいいや、と否定した。

「そうじゃねえよ」

自分でも驚くほどに、幼少期から育ったスラムだが愛着はない。名残惜しいのはスラムではなく、何も知らせず置いてきたネネだった。今も独りで自分の帰りを待っているのだろうか、と。

「・・・行くぞ」

スラムに背を向けて歩き出すルークにジェルダが続く。

彼らが今から向かう場所は、生まれ故郷であるベルガラ王国。ドロシーの西側に位置する、かつては王権がとても強力な国だった。今は敗戦国としてドロシーの支配下となり、すべての王族は粛清されたとしている。――ルークを除いては。

ベルガラへ行き、そしてルークはドロシーに挑むことになる。ベルガラの権威を取り戻すために、王国を復活させるために。

「血筋をなにより重んじるベルガラでは、頂点に立つ者は必ずベルガラ王家の血を持つ者でなければなりません。でなければ、民はついてきませんので」

「めんどくせえ国だな」

ジェルダは眉をしかめて息を詰める。

「・・・そうおっしやらず。」

ベルガラはドローシャに次ぐ歴史を持っております。その王家の血筋は創立から一度も耐えておらず、世界最古の王朝とも言われています。

国の誇りなのですよ、ベルガラ王家は」

「やっぱりめんどうだ。・・・勝算はあんのかよ」

国を取り戻すためにはドローシャという世界で最も強力な国を退けなければならぬ。民の力を借りてもドローシャとベルガラでは大人と子供、普通に考えれば勝機があるとは思えなかった。

ところが、ジェルダには勝てる自信があった。彼は声を低くして深く頷く。

「貴方にお渡しした本、それはベルガラ王家に古くから伝わる古文書です。詳しくは存じ上げませんが、どうやら“人ならざる者と契約を結ぶことができる”のだとか・・・。

それを利用すればドローシャの軍をはるかに凌ぐ力を手に入れることも不可能ではない、と」

「なら戦争が起こった時点で使えばよかったじゃねえか」

ジェルダの言葉が本当なら、古文書を使えば戦争に簡単に勝つことができたはずだ。しかしベルガラは戦争に負け、こうしてルークの手元にある。

「わかりません……」

しかしベルガラ陛下はかなり変わった方だったそうで、オーティスとの戦争にあまり乗り気ではなかったようなのです。

その古文書を使えるのはベルガラ王家の血を持つ者のみ。戦争を推し進めた臣下に扱うことはできなかったのでしょうか」

「どうやって使うんだ？」

ルークは疑い深い眼差しで古びた本を眺める。見たこともない文字はおそらく解読することも難しいだろう。契約を結ぶにしても契約の内容すらわからない。そもそも契約する相手は何なのかすらわからないのだ。

ジェルダは淡々と答えた。

「私がそれを預かった方からは《相応しき場所にて》と言っていました」

つまり、特定の場所ではしか使えないということだろうか。どちらにしてもわかっていないことの方が断然多く、しばらくはヒントを頼りに探すかなさそうだった。

ルークは気が乗らず、舌打ちをして本を乱暴に仕舞い込む。

「こんなボロに振り回されるなんざゴメンだ」

「ルーク様、そうおっしゃらず……」

「まったく、めんどくせえ」

ルークは一度だけスラムを振り返り、再び背を向けて歩き始めた。

15話 王と王妃と謁見

ネネに与えられた部屋は、今までの暮らしからは想像できないほど豪華なものだった。食事も入浴も着替えも贅沢を尽くしており、まるで金持ちのペットにでもなった気分だ。

綺麗に磨かれた窓ガラス越しに見える景色は、埃に曇ることなくありのままの美しさを映している。庭に積もった落ち葉も人の足に踏みつけられることなく、赤々とした色を保ったまま景観に華を添えていた。

「だーいじょうぶだ！俺に任せてくれ！」

隣で頼もしい発言をしているのはランス。

謁見の間へ向かう途中でだだっ広い廊下を歩きながら、ネネはため息と共に肩を落とす。今からドロージャ王と王妃に会わねばならないが、彼女はあまり気乗りしなかった。

噂によると完璧とも揶揄されている現王レオナード陛下は怒らせると怖い、と耳にしたことがある。王妃エルヴィーラに限ってはかつて彼女を怒らせたベルガラは王城ごと吹き飛ばされらしいのだ。

一応師匠に作法や礼儀は一通り学んだものの、きちんと実践できるか怪しい。そもそもネネにはルークのことがある。何を言われるかわからない。

そこでネネの心中を察しているランスが朝からつきつきりでネネを

励まそうとしているのだった。

「確かに母さんは怖い！父さんはもっと怖い！だが話がわからない人たちじゃない！」

きつとネネのことも気に入ると思うんだ！」

「あ……洗濯物……まわしたっけ……」

「そもそも恋愛なんて自由なものなんだ！人の恋路を邪魔する奴は馬に蹴られて死なうて言うし！」

「まあ……だいじょうぶかな……」

「そう！問題ない！大丈夫だ！」

ちよつと雰囲気ただ事じゃないけど慣れれば大したことはない！」

「……帰って確かめたら……いつか……」

「やっぱポジティブっていいよな！」

「……虫、全然いないんだけど……」

相変わらず話が噛みあっていない2人。

兵士たちはハラハラしながら後ろで見守っていたが、ランスの中では何故か会話は成立しているらしい。今のところ特に問題はなさそうだった。

ランスが大きく重そうな扉の前で足を止め、ネネの方を向く。ここが外部の者が王族との謁見を許される場所、謁見の間。本来ならば王子であるランスもここで会うはずなのだが、本人がコレなので言

っても仕方ない。

「ここだ、開けていいか？」

訊ねたくせにネネの返事を聞く前にちゃっちゃんと扉を開けるランス。

一瞬部屋の明るさに目が眩んだが、玉座に座っているランスによく似た男性がドローシャ王、隣に居る黒髪黒目の女性が王妃で間違いないとすぐに断言できた。なぜなら彼らの美貌と纏っている空気そのものが普通の人間とは少し違っていたからだ。

目が合った瞬間にピリツと肌が焼けるような衝撃が走りネネは後退したが、ランスが背中 hands を添えてくれたお陰ですぐに踏み留まった。

ランスは頬を膨らませて2人を睨みつつ文句を言う。

「2人とも、そんなに睨むなよ。ネネが怖がってるじゃん」

「なんだ、ランスもいたのか」

「昨日帰って来たばかりなんだ」

最初に口を開いたのは王妃の方だった。

最強の魔女と名高いドローシャの至宝。どんな花や宝石よりも美しいと言われている、この世界で最も美しく強い女性。まるでこの世界にあるすべての美しい物が彼女のために存在するかのように、身に纏っているドレスも、豪華な城も、彼女の引き立て役に過ぎない。

しかし見た目の衝撃とは裏腹に、その言葉も言葉遣いもとても気さくなものだった。

エルヴィーラ王妃はネネを見てから口角を上げる。

「遅かったな。」

急に呼び出したあたしらも悪かったけど」

「・・・遅すぎだ。他の魔女たちはもう用を済ませて帰った」

王のほうは・・・ちょっと怖い。顔立ちはランスによく似ているが、性格はどうやらランスと真逆らしい。

オブライトに包まずズバツと言ったレオナード王に、ランスは笑いながら頭を掻いた。

「あはは、まあいいじゃんこうやって来てくれたんだしさ。
ほら、ネネ、挨拶」

まるで保護者のようにランスに促され、ネネはおずおずと顔を上げて口を開く。

「・・・ネネ・・・です」

「あんたが荒廃の魔女の弟子だな、話は聞いているよ。ルーカス・ブラッドのことも・・・大変だったな」

「・・・まあまあ」

「スラムの外はどうだ？この城もデカくて驚いただろ」

「・・・べつに・・・」

掴みどころのないネネに王と王妃は顔を見合わせる。噂には聞いて

いたが実際に会ってみるとやはり違和感が拭えない。
今度はレオナード王の方が口を開いた。

「収集をかけたのは例の件が全てだ。ベルガラ王家に生き残りがいたことに対し、ドロシーの総力をかけて探し出すため。

手紙でのやりとりは漏洩の危険があるため、直接集まってもらった。戦争の記憶も新しく周辺諸国に混乱を招きやすいため一切公にしない」

ランスと似ているはずなのに似ていない。レオナード王は王妃よりもさらに人間っぽさの欠片もない容姿だった。完璧すぎるのだ。吸い込まれるように視線が向かう王妃とは対照的に、レオナード王にはあまり視線を向けたくない。

ネネは目を細めて遠慮がちに口を開くと、小ぶりの唇から小さく覇気のない声が漏れる。

「・・・何をすれば・・・？」

「事が収まるまでお前にはこの城で過ごしてもらおう」

レオナード王の声が広い謁見の間で重々しく響く。

ネネは2人から視線を外し、無言のまま俯いた。すぐに玉座から降りたエルヴィーラ王妃は、ネネの肩を持ち、視線を合わせるように屈んで申し訳なさそうに言う。近くで見ればまた凄い迫力。

「悪かったな、大変な思いさせて」

「・・・いえ」

「辛いよなあそりゃ。まさか恋人がこんなことになるなんて思っ

なかっただろうし。

そっとしておいてやりたかったんだけど、スラムを牛耳ってるような実力ある奴を野放しにするわけにもいなくてさ……にやつ！」

にゃ？

一斉に見守っていた王やランス、兵士たちが頭の上にクエスチョンマークを乗せたところで、王妃は今度は大きな叫び声を上げた。

「ぎゃあああああ！！なんか動いた！！動いた！！」

「ヴィーラ！？」

慌てて駆け寄るみんな。ネネの肩を掴んでいた手をワナワナ震わせる王妃の様子に、攻撃を受けたのかと勘違いした兵士たちは剣を構えてネネを取り囲む。

「ストップ！お前らやめろ！！」

ここでもまず庇ってくれたのはランスだ。ネネの前に立ち、すぐに兵士たちに制止をかける。

「なんか動いたんだ！肩の所！！」

必死のエルヴィーラ王妃の訴えに、ランスは首を傾げながら肩に手を置いた。すると確かに、何かが動いた。何とも言えない堅い感触が一瞬盛り上がったのだ。

おそろおそろもう一度触つてみると、ネネが「……ああ」と納得した様子で首元から服の中へ手をつ込み、いつもの要領で取り出

す。

「・・・・・・これ？」

「ああ、それぞれ・・・・・・って蛇！？」

素っ頓狂な声を上げるエルヴィーラ王妃。一方顔の目前に蛇を突き出されたランスは笑顔のまま固まっている。

「・・・・・・ペット」

「ペットは服の中に仕舞うものじゃありません！！」

王妃は全力で訴えた。

レオナード王は頭痛に耐えているかのように眉間にしわを寄せ頭を抱える。

「じゃあ・・・・・・非常食？」

「どっちもダメだっつの！ってか食えるかつ！」

結局ネネのペットは危険物とされ、兵士にネネごと謁見の間から摘まみ出されたのだった。

16話 ヴィラとネネ

「というわけで！」

「・・・何が？」

「というわけで！！！」

ネネの部屋でエルヴィーラ王妃——ことヴィラはごり押しで話を進める。結局謁見の間ではろくに話もできなかったので、場所を変えて話すことになった。高い身分でありながら自分からネネの私室にまでやって来る辺り、本当に庶民派の変わった王妃様らしい。赤毛と銀髪の2人の兵士が見守る中、ヴィラはネネの目の前に座って腕を組む。

「ネネには今日からここで暮らしてもらう。それからちゃんと魔術も勉強するんだ、いいな？」

「・・・」

魔女としてネネが城に呼び出された理由は、ここで暮らすことと修行に励むことの2つ。

不服だったらしいネネはそろりとヴィラから視線を外そうとしたが、すかさずヴィラがネネの両頬を掴んで自分の方を向かせた。

顔が近い。

「いいな？」

ヴィラに凄まれ、仕方なくネネは返事を返した。

「・・・・はい」

「よし、何かやってみろよ」

「・・・・何を？」

魔術、とヴィラは端的に話す。つまり魔術を自分の目の前で披露しろ、と。

ネネは少し悩んだ挙句、蛇の鱗と獅子のヒゲ、イノシシの目玉などを鍋に放り込む。材料が溶けてふとネネが顔を上げると、ヴィラと2人の兵士はいつの間にか壁に張り付いていた。まるで壁紙と一体化しているかのようにべったりと。

何かの新しい遊びだろうか、と、ネネは無言で首を傾げる。

「・・・・？」

「？——— じゃない！気づけ！自分のしていることに気づけ！！自分の手の中にあるものをよく見てみる！！
つて違う違う！！こっちに近づけるなあああ！！」

ネネは潰れたカエルの死体を握ったままやはり小首を傾げる。

ヴィラと2人の兵士は青ざめた顔で怖いもの見たさに鍋の中を覗き込んだ。ドロツとした目玉がこちらを向いた瞬間、言い様のない悪

寒が背筋を走って首を横に振った。赤毛の兵士に至ってはよほど堪えたのか、息も絶え絶えと言った様子で今にも失神してしまっていた。

「それはなんなんだ！」

「……性欲減退薬」

「マジでか……!!」

一瞬ヴィラは瞳を輝かせたが、鍋の中身を見てすぐに思い直す。

「——だ……だめだ、ちょっとでも欲しいと思った自分が馬鹿だった!!」

「欲しいと思ったんですか、ヴィラ様!？」

「やめてくれ!!!いくら超人のレオナードでも材料を知ったらひっくり返っちゃう!!」

兵士2人の話を聞くと、どうやらヴィラは彼女の夫であるレオナードに飲ませる気だったらしい。もし彼女が思い直さなければ、あわやレオナードはゲテモノを口にしなければならなかったところだった。危機一髪。

ヴィラは気を取り直し、決死の思いで壁から一歩だけ前に進んだ。自分を奮い立たせているのかピンと背筋を張り、仁王立ちで自分よりも背の低いネネを見下ろす。

「そんなもの飲めば性欲どころか寿命も削れるだろう!!魔術って

「言わねえ!!」

「……えー」

「えー、じゃありません!!」

「つてか本当にこんなやり方を荒廃の魔女から習ったのか!？」

「……」

「やっぱり違うんだな!! 違うんだな!？」

大声を出して興奮するヴィラはまた一歩近づいたが、鍋の中身が見えてまた一歩後ずさる。

「と、とにかくそれは止めだ! 他に何かできないのか? 水を出したり、火を炊いたり……。占いとかでもいいんだぞ?」

ネネはカエルの死体を握りしめたまま上を向いて考え込む。ヴィラと2人の兵士たちはゴクリと唾を飲みながらネネが思いつくのをまつた。

ところが、数分かけた後に出てきた答えは全くの検討ハズレ。

「……ない」

「はあ!?! 何年も弟子入りしてて何もできないのか!?!——
それでもお前魔女————ぎゃああああごめんなさいごめんなさいごめんなさい!?!」

馬鹿にされて気に障ったらしいネネはカエルの死体をヴィラの方に

向ける。ヴィラはまた壁に張り付いて何度も謝り倒した。
ネネは仕方ねえな、といった表情でカエルを向けるのは止めてあげた。

ホツッと安堵の息を吐く3人。

「この子・・・ランスよりも手のかかる・・・」

「っていつか次元が違いますよ、魔女さん」

「性質が悪すぎます」

兵士2人の言葉にヴィラはまだ彼らを紹介していなかったことを思い出し、改めて挨拶をし直すところから始めよう、そして今までの魔術と言えないゲテモノ魔術を見なかったことにしようと、ヴィラはひきつった笑顔を作って赤毛の兵士のほうを指差す。

「紹介が遅れて悪かったな、ネネ。

この赤毛はレオナードの護衛騎士でアルフレット」

「どうも」

「で、こっちがあたしの護衛騎士、シルヴィオだ」

今度は銀髪のほうを指さすと、彼はぺこりと頭を下げた。中世的な顔立ちが可愛いらしい男性だ。

「で、あたしがエルヴィーラ・・・ヴィラって呼んでくれ。

一応王妃・・・うん、王妃なんだけど・・・うん、よろしく」

歯切れの悪い自己紹介で締めくくり、さっそく本題（実質2回目）に入る。

「突然魔女たちに収集をかけたのはいくつか理由があつてね。まずルーカス・ブラッドがベルガラ王家の生き残りだつて少し前からわかつてたんだけど、全スラム支配が目前に迫つてゐるって監査から連絡が入つて・・・こりゃヤバイつてなつたわけ。

知つてると思うけど、スラムの支配なんて誰にも無理だつて思つてた。だからルーカス・ブラッドが成し遂げればスラムの外でも彼は有名人になる。さらにベルガラ王家の生き残りが居たつて市民に広まれば、大混乱」

名を上げずひっそりと生きていれば問題視することはなかった。しかし有名になつてしまえば野放しにしているドロージャは非難されるだろう。

世界の中心であるこの国は、一点の曇りも許されないのだ。

「だから魔女会議を開いて検討して・・・、それから彼の処遇をどうするか決めようと思つた」

「・・・どうなつたの」

「とりあえず保留、という名目の搜索。

ルーカス・ブラッドがベルガラに行つたつて報告が入つたから・・・」

その先はネネの前で言うことはできなかった。ヴィラは声のトーンを変えて話を変える。

「とにかく、ネネには事が収まるまでここに住んでもらうことに決まったんだ。悪いけど。」

ついでに荒廃の魔女から頼まれたんだよ、お前にあまり魔術を教えてあげられなかったから、変わりに教育してほしいって」

「……めんどろ」

「ボソツて言っても聞こえたからな！」

ネネはあまり向上心豊かな方ではないらしい。最も、修行というのもネネの動向を探るための一種の建前に過ぎないだろうが。

ヴィラは肩を揺らして大きく息を吐き、ネネの顔を遠くから覗き込んだ。

「にしても本当に全く笑わないんだな。我慢してるのか？それとも単に面白くないだけ？」

「……」

ネネは無視して鍋に材料を放り込むと、一気にもくもくと煙が立ち、部屋中が煙だらけに。だんだん前が見えなくなり煙たくなってきた3人は、手で払いながらゴホゴホと咳き込む。

「こら！それをやめなさい！」

とにかく、窓を開けてくれ……！」

窓はどこだとうろついていると、急に目の前に現れるネネの姿。ヴィラはビクツと身体を震わせてから、ネネの差し出した小瓶を見つめた。

「・・・なんだ？」

「・・・性欲減退剤。ヴィラ様のために作ったの・・・」

「・・・」

「・・・」

ネネはまだ無言のまま小瓶を差し出している。

ヴィラはこれを受け取るべきか受け取らないべきか考え込んだ。とても魅力的だが引つかかっているのはもちろんその材料。蛇に獅子にイノシシに蛙。一般的な許容範囲内はとうに超えている。

「・・・ルーク様は普通に飲んでたけど・・・」

「マジ！？効果は！？」

ビシッ！と無表情のまま勢いよく親指を立てるネネ。その効果に期待して手を伸ばすヴィラ。

しかし、それはヴィラの騎士である銀髪の男、シルヴィオがネネの手を払い退けたことで終わりを告げた。

白くて小さな手から離れた小瓶がカラカラと床を転がる。

「ヴィラ様を唆さないでください！」

「・・・そう・・・残念」

結局煙まみれの部屋では話にならないと、3人は身も心もぐったりしながらネネの部屋を後にしたのだった。

17話 アルフレットの憂鬱

感情も読めず付き合い辛いネネだが、それでもランスとヴィラは根気強く接していた。ところが四六時中世話をしなければならない侍女たちは話が違う。

もともと彼女たちは貴族のお嬢様。ネネのゲテモノ好きに順応できるはずもなく……

「きゃあああああああ！！！」

王城に女性の悲鳴が響き、執務室でレオナードはまたかと頭を抱えた。小さな変わった魔女が来てからというもの、毎日のように悲鳴を聞いている。きっと今頃ネネの部屋では新しい侍女が気絶していることだろう。

「……他に適任者はいないのか？」

「残念ながら……」

レオナードの問いに答えるのはこの国の宰相であるルードリーフという男。ネネと同じく水色の髪をしているが、彼のほうが少し色が濃い。

「新しく雇うことは・・・」

「・・・それが、一応募集はかけているのですが・・・」

はあ、と2重のため息が。

元々城に居た侍女たちはネネの世話を嫌がって早々にストライキ。困ったレオナードはすぐに他の侍女を手配したが、どんな女性であってもネネの部屋を見ただけで卒倒してしまうのだ。

ケロッとしているのは旅慣れしているランスくらいなもので、凶太いヴィラですら青い顔をして帰って来る時もある。

「そんなに酷いのか？」

コクリと頷くのはレオナードの隣でぐったりと座っているヴィラ。赤色のドレスを纏っているせいか、いつもより顔色が悪く見えた。

「一度部屋に行ってみればわかるぞ、あの子の趣味が」

「はあ・・・困りましたね。」

ご自分の世話はご自分で・・・とお願いしたいところですが、一応監視もつけておきたいので・・・」

なにしろネネは今ドロシヤにとって一番の悩みの種であるルークの恋人。魔女だからドロシヤ王の命令には逆らわないはずなのだが、それでもやはり信用するわけにはいかない。

国の中枢に住まわせる以上は、監視をつけることが必要不可欠だった。

何かを思いついたらしいヴィラがぽんと手を叩く。

「そうだ、アルフレットかシルヴィオに任せればいいじゃん？」

名を呼ばれた瞬間ビクリと震える赤毛と銀髪の兵士。しかしヴィラの提案はすぐにルードリーフによって却下される。

「なりません。」

騎士なのですから、あまり主人のそばを離れては本来の仕事ができなくなります」

「じゃあどうしろってのさ。」

雇っても雇ってもすぐに辞めてくじゃん」

「こうなると問題は侍女じゃなくてネネ様の方でしょう。どうにかありませんか？」

「無理じゃないか？絶対にペットは手放さないだろうし。」

今時の貴族のお嬢様に蛇や蜘蛛の世話ができるなら話は別だけど」

「無理ですね」

さてどうしたものか、と再び考え込む一同。そういえばとレオナードが切り出した。

「ランスはどうした。あれは仲が良かっただろう」

うつと息を詰め、ルードリーフが言いにくそうに答える。

「・・・もうすでに旅立たれました」

「あんの放蕩息子っ」

プルプルと震えるヴィラの拳。旅好きで城に居ることのほうが少ないランスは、親に挨拶もすることなく再び旅に出てしまった。ヴィラはボンツとアルフレットの肩を叩く。

「悪いがもうお前しかない」

「ええええええ！無理っすよ！絶対に無理！！俺爬虫類苦手なんですって！！それに陛下の護衛が・・・！」

「仕方ないだろ、他にいないんだから。レオナードもいいだろ？」

「わかった、アルフレットに一任しよう」

「そんなあああ！」

絶望に歪んだアルフレットにシルヴィオとルードリーフからは憐れみの視線が、ヴィラからは笑顔が送られた。

意を決したアルフレットは3回ノックをしてゆっくりと扉を開けた。中には異様な空気が漂っており、何度来ても慣れない。目の前にある棚には所狭しと瓶が並び、そのコレクションぶりは素晴らしくもあるが決して目の保養にはならないゲテモノが詰められている。

視線を棚から外すとすぐにネネの姿が視界に入った。窓から外を眺めている彼女の横顔に表情はないが、アルフレットには何故か悲しんでいるように見える。

一番辛いのはネネなのだと、その時に初めて彼は思った。無理やり好きな人と引き離され、城に閉じ込められて・・・彼女には何の非もないはずなのに。

「・・・あの、ネネさん？」

「・・・魔術の修行ならしない・・・」

振り向くことなく窓の外を眺めたまま答えるネネ。

「いや、そうじゃなくってですね。今日から俺がネネさんのお世話をすることになりましたんでご挨拶を。」

男なんでもいろいろ不便だと思うけど、まあよろしくお願いします・・・

「ほどほどに」

「……どうも」

無視されずきちんと返事が返って来るので少し安心したアルフレットだったが、右足に突然違和感を感じ見下ろすと蛇が巻きついていて全身が凍りつく。

ネネのペットのバートリだ。

アルフレットは込み上げる絶叫を押さえ、ニコリと無理やり笑った。一刻も早く逃げ出したいという心の叫びを無視して無理やり作ったそれは、彼の史上最悪の笑顔であった。

「な、何か必要なものはないですか？本とか……たまには読書もいいもんですよ、気が紛れますし」

「……いらない」

「じゃあ何か困ったことでもあったら相談してください。俺これでも千才近くて人生経験は自分で言うのもなんですけどなかなか豊富うううううう！！」

急に足に巻きついた蛇が動き出し素っ頓狂な声を上げる。振りほどきたいが噛まれるかもしれないと思うとなかなか手が出せない。アルフレットはおそろおそろ訊ねた。

「あの……ネネさん？」

この蛇……毒とかは……ありませんよね？」

「……ない」

とりあえず命に危険はなさそうだとほっとするアルフレットに、ネネは彼の肩を見て続ける。

「蜘蛛はあるけど・・・毒」

「蜘蛛!？」

ネネの視線の先を辿ってみれば——自分の肩にちょこんと乗っている手のひらサイズの大きな蜘蛛。

「くくくく蜘蛛って可愛いですよなんだか愛嬌があって毛が生えてるのはちょっと怖いけど名前なんていうんですかつつ」

早口言葉で息継ぎなく一気に言い切ったアルフレットにネネは近づいて蜘蛛を自分の手に乗せた。アルフレットよりもずっと背の低いネネは顔を上げ、黄土色の瞳で真っ直ぐに彼を見る。

「ツエペシユ」

「へえ、変わった名前っすね。あの、蛇の方も外してもらえるとありがたいんですが」

「・・・そっちはバートリ、女の子・・・」

「あ、あのお・・・」

「もう一匹いるけど・・・会ってみる?」

「遠慮します!-!」

0・1秒で綺麗に即答した。

ネネは至極つまらなさそうにアルフレットの足にいる蛇を自分の腕に巻きつける。やっと安心しきった表情になり、彼は本題を切りだした。

そもそもネネの世話係りになったのはネネを監視するためだ。怪しい行動をしていないか探る必要がある。

「大丈夫ですか？その・・・恋人と会えなくて、辛くないですか？」

「・・・べつに」

「会いたいとは思いませんか？心配じゃないですか？」

「・・・べつに」

「?・・・そう・・・すか」

かなり淡泊な答えであるが、普通恋人に会えないと寂しいものだ。例えばレオナードとヴィラが引き離されようものなら彼らは見事な暴れっぷりを披露してくれるだろう。そこまではないにしても、国の命令で勝手に別れさせられたら普通は腹が立つ。

やはり、ネネは魔女。だからドロシヤ王には逆らえない。ならば恋人の肩を持つような真似もしないだろう。

アルフレットはそう納得し、満足顔で頭を下げると部屋から出て行った。

ネネは半開きにされたままの扉を閉めて鍵をかけると、両手に乗ったペットを優しくテーブルの上に乗せる。

そして無言のままもう一度窓の外を眺めた。今頃ルークが旅しているであろう、ベルガラがある西の方を向いて。

18話 お茶会とマナー講座

城に来て1週間ほど経ったころ。

ネネとヴィラは東の庭園でお茶をしていた。騎士のシルヴィオからはネネと2人きりにならないほうがいいと散々言われたが、女水入らずでなければ話し辛いこともあるだろうとヴィラが気を回したのだ。

紅茶の上品な香りと香ばしい焼き菓子の香りが漂う中、よく手入れの行き届いた華やかな庭を眺める。スラムでは想像もつかない贅沢な時間の過ごし方だった。

「どうだ？ここは。もう慣れたか？」

美麗の極みを尽くしたかのように美しくヴィラがほほ笑む。

「……まあまあ」

「アルフレットはどうだ？結構がんばってると思うんだけど」

「……まあまあ」

相変わらずネネの表情に変化はない。ヴィラは大きく肩をすくめてカップを傾けた。

「辛いなら辛いって言えばいいのに」

「・・・べつに」

「会いたくないのか？好きなんだろ？あの男のことが。あたしだつたら国の命令なんて無視して会いに行くけど？」

「・・・へえ」

「へえ・・・ってあんたね」

まるで他人事のように生返事を返すネネ。もうヴィラからは呆れかえったため息しか出てこない。恋とは普通情熱的なものではないのか。身分も年も関係なく、時には国や性別までも超えて。

しかし今のネネはこの有り様だ。情熱の“じょ”の字もない。

「やっぱり魔女だからなのか？・・・だとしたらすげー罪悪感」

王の命令に従わざるを得ず、ルークへの恋心を消そうと魔女の本能が働きかけているとしたら・・・。

ネネの無表情では確信が持てないが、とんでもなく悪いことをしてしまったのではとヴィラは頭を抱えた。

「どうしよう、参ったなあ。

ベルガラ相手じゃ認めてやるわけにもいかないし」

本来ならば王妃として国のために犠牲を厭わないヴィラもさすがに悩ましいところ。こうして目の前で本人と対峙し交流を図ることで、多少情が移ってしまったのかもしれない。

「・・・」

ネネはカップを持ち上げて傾けたが、飲まずにソーサーに戻して小さくため息を吐く。

王城での生活は平和だが暇で仕方なかった。気まぐれにヴィラの誘いに乗ってみても、王妃とスラムの小娘じゃ趣味が合うはずもない。

「ベルガラ王家の生き残り、かあ。」

あんときは全部ぶっ壊したつもりだったんだけど・・・」

ベルガラ王城を破壊した本人が物騒なことを呟いている間、ネネは立ち上がってさっさと歩きだした。慌ててヴィラが後を追う。

「おい！ちょっと！どこに行くんだよ」

「・・・ペットたちの餌の時間だから」

ネネは完全に振り向くことなく行ってしまい、ヴィラはぼりぼりと頭を掻いて肩を落とした。

「せめて会わせてあげられたら・・・」

「無理だな」

ぼりりとつぶやいた言葉に返事が返ってきて、ヴィラは後ろを振り返る。

「レオナード！」

「未だにルーカス・ブラッドの居場所が特定できていない。おそらく何かある」

ドローシャの総力を上げての探索もむなしく、まだ目撃情報のひとつもなかった。魔女の魔術も人海戦術も通用しないということは考えられない。

つまり、こちらの手を読んで何か対策を施したに違いなかった。

レオナードはヴィラの手を取って彼女を立たせると、2人は自然と東の庭園を歩きだす。夫婦として手を繋ぎながら何度も通ったお馴染みの散歩コースだ。

「魔女の占いですら見つけれないってことは・・・ワケあり？」

「そのようだ。元々ベルガラ王家は秘密が多くて得体がしれない」

不気味だな、とレオナードが言うとヴィラは天を仰ぐ。魔術を凌ぐ魔術でない“何か”。レオナードの言うとおり不気味だ。

「そついや名前も公表しないほどの徹底した秘密主義だったな、あの国は。」

国民が王の名前知らなくてどうするよ」

「矜持が高くて他者を受け入れないんだろう」

「それが自国民であっても・・・ねえ」

強い風が吹いて2人はしばらく口を開かなかった。冷たい北風に乗ってヒラヒラと木の葉が舞い、目の前を踊りながら地面へと降りてくるそれはなんとなく物悲しい。

さらにもう一陣の冷たい風が吹きヴィラが身を縮めると、レオナードは自分の肩に掛けられていたローブを彼女に巻きつけた。

「・・・特に、先代の王はかなりの変わり者で傀儡だったと聞いている」

「傀儡って？」

「実質的に権力を持たず臣下の言いなりになっている形だけの王のことだ。言うなれば人形。」

先々代はノルディ戦争の起こる直前に亡くなり、急きょ新しい王を立てたと」

邪魔者を消し、都合のいい者を選ぶ。手っ取り早く思い通りにできるため政治家の好みそうな手口だ。

「じゃあベルガラ王は戦争に反対してたのか？」

「そこまでは分かっているが、そもそもノルディ戦争の発端となつたのはベルガラ王家の人間たちだ。そもそもあの一族は血気が荒い上に行動力がある。」

ルーカス・ブラッドにも同じ血が流れている以上、油断できないだろう」

「本人もベルガラに行つて戦う気満々だからな。ネネ、どうすんのかなあ」

レオナードは目を細めてヴィラを見た。彼女は完全に恋する乙女目線でネネに同情している。

できることなら愛しい妻の願いを聞いてあげたいところ。

「何か他に方法がないか考えてみよう」

「うん、そうだな」

ヴィラとレオナードは手を繋いだまま、東の庭園を抜けて自室へと向かった。

「ぎゃ ああああ！何やってるんですか！！食材を潰さないでくださ
い！！」

「……ルードリーフの顔」

「やめてくださいいいいいいい！！」

ネネの目の前に置かれたプレートにはぐちゃぐちゃになった食材の残骸が。彼女曰く、それはこの国の宰相でありネネのマナー指導を担当しているルードリーフの似顔絵だそう。

スラム育ちのネネに食事マナーは難しいだろうと最初は優しく教えていた彼も、ネネのやる気のなさっぷりに涙が零れ落ちそうだった。

「お願いですから真面目に……いじめないでください!」

「……」

「だから食事中に爬虫類の世話は禁止です!仕舞ってください!」

自分の首に蛇を巻きつけたまま離そうとしないネネ。ルードリーフが必要以上に近づかないための見事な防衛線を築いてくれている。アルフレットは部屋の隅っこで「ご愁傷さまで」とルードリーフに合掌していた。

「ナイフを右手に持って……そうです。」

フォークで止め、斜め30度の角度で奥から手前に」

無表情で肉を切り刻むネネの姿はどことなく恐ろしい。たかがステーキ用のナイフなのに、まるで子供に与えてはいけないものを与えてしまった気分だ。

「……食べていい?」

「だめです!……って言った傍から食べない!まったく、ヴィラ様より手のかかる……」

お腹が空いていたのかパクパクと食べ始めたネネに、先ほどまで必死になって教えたマナーは全く無視されていた。口の周りにはべつとりとソースがつき、皿の外にも切れ端や零れ落ちた食材の欠片が散らばっている。

そしてほとんど食べ終わると、今度は両手に持ったナイフとフォークの柄をテーブルに小突いておかわりを要求してきた。

「駄目です！いくらなんでも食べすぎですよ。
もう3人前も召し上がったじゃないですか」

——ドンドン

「駄目です」

——ドンドン

「駄目です、無言で要求しない。
そして蛇をこちらに近づけて脅さない！！」

ネネは不満そうに頬を膨らませてルードリーフに向けた蛇を服の中に仕舞い込んだ。

彼は安堵と断念から頭を抱えて首を横に振った。

「貴女はマナーよりそれ以前の問題ですね・・・」

「まあ落ち込むなって」

ぽんぽんと肩を叩いて励ますアルフレット。ルードリーフは恨めしげにネネを見る。

「どうしよう・・・このままでは来月の誕生祭に間に合いませんよ」

「多めに見てくれるだろ、まだ成人してないんだし、仮にも国に保護されてる魔女なんだし」

「これ以上悪い噂が広まらないといいのですが・・・」

このままではドロシヤの沽券にかかわる、と宰相としての悩みは尽きない。一方ネネは食事に未練があるのか空になった皿を物欲しげに見ていた。

「せめて愛想というものをご存じだったならマシだと思うのですが・・・」

「ネネさんには不可能だな」

「ですよね」

「・・・おやつ」

催促の止まないネネを見て2人のため息が重なる。

「・・・だんご」

「いい加減にしないと太りますよ。」

今晚からは半分に減らしますからね」

その瞬間ルードリーフの前をキラリと光るものが通り過ぎた。壁を

見れば見事に突き刺さっているナイフ。ネネがルードリーフを目掛けて投げたものだ。その見事な刺さりっぷりに「うゝわゝ」とアルフレットから声が漏れる。

「殺す気ですか！！」

どうどうと宥めるアルフレットの功もむなしく、結局ネネはそれから小一時間ほど説教を食らったのだった。

19話 蝕む熱

ネネはキングサイズのベットの上で、うつ伏せになりながら地図を眺めていた。正確には、地図の中のベルガラ王国を。そつと細く白い指で何度も何度も同じ場所をなぞる。今頃この辺りでルークが旅をしているかと思うと離し難かった。

月明りの異様に明るい夜。

木枯らしの音以外は何も聞こえない。額に張り付いた水色の髪は汗でうっすらと湿りを帯びている。

そしてパチンという乾いた音とともに部屋に明かりが灯った。続くのはアルフレットの呆れたような声。

「また電気もつけないで。夕食持ってきましたよ」

ガラガラとワゴンを押す音と共に肉やチーズの焼けたいい香りが広がる。いつもならすぐにとびつくネネだったが、今回は気だるそうに少し身体を起こしただけで再びベットに沈んでしまった。

異変に気付いたアルフレットは駆け寄り、髪を掻きあげてネネの額に手を当てる。

少し熱い。

「微熱がありますね。」

寒くなってきましたし、風邪でしょう。一応医者を……」

立ち上がろうとしたアルフレットは何かにつ張られて動きを止めると、ネネの手がシャツの裾を掴んでいた。

「……いない」

「もしかして医者嫌いですかあ？ネネさんってば意外に子供っぽいっすね」

うんうんと満足気に頷くアルフレットに蛇が口を開けて威嚇する。ところが彼は余裕の笑みを崩さなかった。

「もうペット攻撃は効きませんよ、慣れましたから！」

「……放っておいて」

「でも風邪はひき始めが肝心ですから医者に——」

「うるさい」

「う……うるさ……」

「いいの……自分で決めたことだから」

ネネから発する辛辣な言葉に動揺するアルフレット。ネネは彼とは逆の方向に身体を向けて、枕に顔を埋めた。アルフレットは肩をすくめて苦笑いする。

「わかりました。その変わりちゃんと身体を休めてくださいよ。何か食べやすいものを作らせましょうか？」

ネネはぶんぶんと首を横に振る。

「じゃあ温かくして今日は寝てください。本当に辛かったら人を呼んでくださいよ」

じゃあ、と静かに扉を閉め電気を消して出ていくアルフレット。急に暗くなった部屋でネネは大きく息を吸い込んで吐いた。

『風邪ではないでしょうに』

「・・・・・・」

他者から見れば独りごとを呟いているように見えるだろうが、実際に声を発しているのはネネではなく蛇の方だった。甲高い声は女性特有のもので、薄暗い中ではどこことなく不気味に聞こえる。

ネネは枕に爪を立て、ぎゅっと抱き込んできつく目を閉じた。身体が燃えるように熱い。

『・・・・それが貴女の望みなら』

「・・・・・・うん」

翌朝、一番にやって来たのはアルフレットではなくヴィラだった。ひよっこりと顔を出してベットの中にいるネネを覗き込む。

「風邪だつて？大丈夫か？」

ネネからの返答はない。しかし、苦しそうな呼吸音はしっかりと聞こえた。

無理やり布団を剥がすと、ネネの額に触れて顔をしかめるヴィラ。

「そ・・・ここまで熱くはないけど、微熱・・・かな」

しかしヴィラの感じる温度よりもネネはずっと辛そうだった。浅く早く動く胸、額に光る汗、症状は高熱のものだ。

「まったく、なんで早く言わねえんだ。

風邪だとも限らないし、すぐに医者に見せて薬を飲めば――」

ネネはぶんぶんと首を横に振る。

「医者が駄目なんて子供みたいだな。じゃああたしの魔術で治そうか？」

再びぶんぶんと首を横に振る。困ったヴィラは腰に手を当てて難しい顔をした。

「自然治癒って言うてもねえ、これ以上に熱が上がるかもしれない。もっと身体が辛くなってもいいのか？」

「いいから・・・出てって・・・」

ヴィラは入口にいるアルフレットに目くばせすると、首を横に振る。病気は本人に治療の意思がなければどうしようもできない。一瞬気絶させて無理やり医者に見せようかとも思ったが、悪化しそうだったのでやめることにした。

「じゃあせめて食事だけでもちゃんととるんだ、いいな？」

返答はなかったがそれを了承と捉え、その時は静かに部屋を出ていくことに。

ところがその後ネネの体調は一向に良くならず、周りは焦り始める。寝ているときにこっそり医者に診せたが、原因はわからなかった。バレないように薬を食事に混ぜても効く気配がない。

さらにはヴィラの魔術でさえ、ネネの微熱に効果がなかった。

——おかしい

皆は次第にそう思いはじめていた。それと同時に焦りも高まっていた。

「病気じゃないんだろ？」

「医者はそう言っている、一応また診せてはいるが……」

執務室でひとつのテーブルを囲み、ウイルスたちは深刻な顔で話し込んでいた。

レオナードが国内で最も有名な医者を手配したものの、それでも病名すらわからない。

「そもそも魔術の効果がない時点で病気ではないでしょう」

ルードリーフの意見にウイルスが頭を抱える。

「それなんだよなあ……。病気でもなく、魔術でもなく……。じやあなんなんだ？」

「わからないから困ってる。本人も治す気がないから尚更だ」

「ありや困るよなあ」

そう、ネネ自身は熱を出してからずっと治療を拒んでいた。もしかして、とルードリーフが閃いて話に割って入る。

「彼女には原因が分かっているのでは？」

「どういうことだ」

「初め微熱を出したときから、彼女は医者に見せるのを拒んでいました。その後重症化してもずっと嫌がっています。しかも何も話したがらず、独りになりたがる。」

もしかしたら、ネネ様には高熱の原因が分かっているのかもしれませんが。そしてそれは他人には干渉されたくないと思っているのかも・・。

だから本人に直接訊けば何かわかるかもしれません」

「知っているとして・・話さないだろう、あれは」

レオナードは眉間にしわを寄せて反論する。ヴィラも腕を組みながら首を縦に振った。

「あの子は自分のこと何にも話してくれないしな。訊いても絶対言わないと思う」

うーん、と静まり返ったその時。パタパタと慌ただしい足音と共にアルフレットが滑りこんで来た。

急いで来たのか肩で息をし、心なしに顔色が悪い。

「レオナード、魔女さん」

「医者はなんて言ってたんだ？」

「このままだと一カ月も持たないって・・・」

「え？」

「だんだん食べ物も受け付けなくなってきたらしくて、解熱剤も効かないしずっと高熱が続いて体力も奪われてて……。もうそんなに長くないって言ってました」

急に重たい空気が部屋に降りる。

ヴィラは親指の爪を噛んだ。

「……たく！どうすりゃいいんだ」

「手の施しようがない以上、ネネ様自身に賭けるしかありません。なんとかして治す気になってくださるといいんですが」

レオナードは片眉を上げてルードリーフの方を向く。

「様は本人に生きたいと思わせればいいのか？」

「じゃあ簡単じゃないか！」

ヴィラがぼん！と手を叩く。そしてずっと身を乗り出し、人差し指を立てて言い切った。

「ルーカス・ブラッドに会わせればいいんじゃないん？」

ガクツと頂垂れるルードリーフとアルフレット。

「それが出来てれば最初から苦労しませんってば」

「相手は居場所も分からない人間なんですよ？しかもわが国と対立する立場にある人間なんです」

「だーかーらー、探すしかないだろ。」

いくら敵国の人間だからって恋人が危篤だって分かったら来てくれるかもしれないじゃん。

「ってか無理やり捕まえてでも会わせるから!」

「ヴィラ・・・」

レオナードが名を呼んで制止を促すが彼女の口は止まらない。

「そうすればネネだって少しは元気出さだろうし、助からないにしても最期くらい会わせてあげようよ。」

好きな人に会えて嬉しくない奴なんでいないだろ?」

「しかし、我が国の立場というものが・・・」

「知らん!!」

ええええ!!と驚き叫ぶルードリーフとアルフレットの2人。

ヴィラは王妃としてベルガラ王家のルーカス・ブラッドを探したいのではなく、ネネという1人の少女の恋人としての彼を探したかった。

どうしようもなかったとはいえ、彼らを引き離してしまった責任の一端は自分たちにもある。

敵だの味方だの言っている間にもネネの身体は徐々に弱ってきているのだ。迷っている暇はない。

「もしもこのことが他国に知られたら我々は非難されます!」

「言わせとけ!」

「そんなあ」

「どうせ処遇に迷ってたんだ。本人の目の前で話し合えばいいじゃないか」

「ヴィラ」

話が止まらないヴィラを牽制するのはレオナードだ。

2人はいつも為政者として心を鬼にしてきた。時には人を殺めても恨まれても、この国のためにと。

しかし今ヴィラが言っていることは真逆のことだ。

「ベルガラはドローシャに齒向かった。その事実は変わらない」

「そうだけど……」

「何の交渉も無しにその男を受け入れれば外交的に多大な譲歩を許したことになる。」

それでは他国に示しがつかないだろう」

「だけど背に腹は代えられないだろ。あたしがいいって言ってんだからいいんだ！」

国とあたしと、どっちが大切なんだよ！」

ヴィラはテーブルに両手をついてレオナードに顔を近づけた。

「わかった、いいだろう」

「「返事早!!」」

コロツと意見を変えた自分の主に目を丸くする2人。さすがに一国の主であるレオナードもヴィラのお願いには1から10まで頷いてしまうらしい。

焦ったルードリーフはあわあわと口を震わせる。

「し、しかし・・・それでは・・・」

「大丈夫だ、ネネの恋人なんだから話が分かるやつに決まってる」

「それはどうかと思いますよ魔女さん、なんせあのネネさんだし」

「さつさと探して、さつさと会わせて、さつさと和解する!これに賭けるしかねえ!」

アルフレットの言葉を無視したヴィラ。

ネネとルークを引き合わせることに決めた以上、彼女のシナリオ通りに進むことを祈るしかなかった。

20話 ベルガラ女王

ルークとジェルダは都心にある人通りのない錆びれた路地裏の民家に居た。

ドロージャから唯一命を奪うことをされなかった、戦争当時を為政者として王城に住んでいた者の家だ。彼は王に近い身でありながら終始戦争に反対していたため、許しが下りたらしい。

そして城を離れここで一人慎ましかに暮らしている。

「申し訳ありません、こんなものしかなくて」

気さくな雰囲気の際はニコニコしながら2人に紅茶を出す。

「はじめまして、レミー・スクイリーンです。」

いやあ、嬉しいですよ。今ではもう私を訪ねてくれる人なんていないくて」

ミルクと砂糖を置き、彼は向かい側に腰を降ろして首を傾げた。

「それで、貴方たちは一体何の用で？」

「はい、それが王家についてお聞きしたいことがあります」

「王家？いまさら何故？」

古びた本と剣を取り出した途端にレミーは目を見張り、震える手を本に向かって伸ばした。

「これは・・・」

「ご存じなのですね!？」

ジェルダは期待を込めてレミーを見つめる。やっとここで手掛かりを得ることができるかもしれない。

しかし彼はすぐに手を引つ込め、警戒するような視線でジェルダとルークを交互に見た。

「何故これをお持ちなのですか？あなた方は一体・・・」

「私はジェルダ・インギス、シュリヴィッツ州の將軍を務めていた者です。

この御方はルーク様、前シュリヴィッツ州総督マルクス殿の御子息に当たります」

「マルクス殿ということは・・・王家の御方なのですね。まさかまだ生き残っているとは。なるほどそれでこれを・・・」

政に携わっていただけあつて頭の回転が速く物わかりが良い。話が早いとさっそくジェルダは話を進める。

「これを預かった方からは《相応しき場所にて》としか聞いていないんです。これからルーク様が王に君臨してドローシャと戦うにはその力が必要不可欠かと思ひまして。

王族でなくとも陛下と近い間柄だった貴方なら・・・何かご存じありませんか？」

レミーは口をきゅつと結んで息を吐くと、古い本を見ながら話し始めた。

「私の知っている限り、それは歴代の王に代々受け継がれてきた契約書かと」

「契約書？」

「ベルガラ王家には遙か昔より言い伝えがありました。

“天より出づる神々の影の、悪魔1人地より現れ、ベルガラの王の善より助かりて、ここに両者の契約を結びたる”……女王陛下は悪魔契約書と呼ばれておりましたが」

「悪魔？なんだそれは」

つまらなさそうに傍観していたルークが初めて口を開き、レミーは戸惑いながら説明する。

「私も詳しいことは存じません」

「どうやって使い、何が起るんです？我々はそれが知りたいんです」

「それはベルガラ王家の血族のみ使える代物。

悪魔と契約することで人知を超えた力を借りることができるのです。……しかし」

だんだん表情が陰しくなり口調が重くなってくる。

「決しておすすめることはできません。女王陛下もよほどのことがない限り絶対に使ってはならないと言いつけられていたようです」

「しかし、ドローシャに勝つにはこれしか方法がないんです。具体的にはどうすれば・・・」

「代償として自らの魂を悪魔に差しださなければなりません」

「魂？」

「おそらく、死ぬということです」

ジェルダは息を飲んで黙り込んだ。

ドローシャに勝つための手段として縋った力、だがルークが死んでしまつては意味がない。ルークの死はベルガラ王家の血が絶えることを意味するのだから。

「そらみる、ろくでもねえ」

「ルーク様！」

鼻で嗤うルークに窘めるように注意するジェルダ。しかしルークの口は止まらない。

「だから言つてゐるだろうが、得体の知れない力に頼るなど。

欲しいもんは自分の力で手に入れる。それができねえなら最初から大口叩くんじゃねえ」

「男前でいらつしゃいますね、ルーク様は」

「うるせえ、もともと俺は興味ねえ。ただ自分の生まれた国を見たかっただけだ」

「ルーク様！なんてことを仰るんです！」

憤慨して立ち上がるジェルダを歯牙にもかけず、ルークは携帯用の酒瓶を取り出しコルクを抜いて煽った。

「・・・ベルガラ王座に上がることが、住み慣れたスラムやあいつを捨ててまで手に入れる価値があるなら話は別だが、今んとこ魅力は感じねえな」

「なっ・・・！！」

ジェルダは声も出せず固まった。王座よりもスラムとネネの方が価値があるなんてあり得ない。

絶句する姿を見てこのままでは血圧が上がって倒れてしまいそうだと、レミーはやりわりとルークのフォローをする。

「差し出がましいようですがジェルダ殿、もしベルガラ王家の復興を何よりも優先されるのなら、ドロージャのもとへ行かれる方がよいかと」

「貴方まで何を言い出すのです！」

「敗戦後もベルガラはドロージャの監視下でちゃんと国として機能しております。きつい言い方になりますが、国自体は王家がなくなっても成り立つのです。」

ドロージャも鬼ではない、自ら申し出た者をいきなり極刑にすることはないでしょう。念入りに交渉すれば不可能ではありませんよ。

その本を使うよりずっと可能性があるではありませんか」

「しかし・・・あの国に頭を下げるなど・・・」

ベルガラ人としてのプライドが許さない。

そもそもルークは絶対にそのような真似はしないだろう。彼は他者に謙ったり気を使うのが大嫌いだ。

「そんなに中心の国と戦いならてめえでやればいいだろ」

「ルーク様・・・そんな」

「結局お前はノルディ戦争の復讐がしたいだけだろうが」

ジェルダは唇を噛んで俯く。

レミーは眉を八の字にして苦笑を洩らした。

「マルクス殿は奥様がおられませんでしたから、このまま黙っていればルーク様の存在は隠し通せるかもしれません。

ベルガラ王家の人間としてではなく、好きに人生をお送りになってもよいと思いますよ、私は」

「貴方は王家を誇りに思っていないかったですか？」

「思っておりましたよ、それはもちろん。しかし・・・」

彼は言い淀み、辛そうな表情で続ける。

「女王陛下は自分の身体に流れる血を厭んでおられました。王家に縛られることを望んでおられなかったのです。拳句には女王となり、

臣下のいいように使われて亡くなられました。

あんな最期を迎えるくらいならば、きちんと選択肢を与えて差し上げられたならよかったのに……。後悔しています」

「でもベルガラはどうなるのです」

「幸い民は以前とあまり変わらぬ生活をしております。そして彼らも十分熟知したと思いますよ。

中心の国に逆らうことは世界の理に逆らうことだと」

世界の理。世界の中心に住まう神と、神に選ばれた中心の国の王。そしてその国にだけ存在することが許される魔女たち。

「人間などちつぽけな生きものですよ。理に逆らうのは無理です」

ジェルダはまだ何か言いたそうにしていたが、言葉を飲み込んで大きなため息を吐いた。

「貴方の言いたいことはわかりました。

確かに人知を超えた力なくしてあの国と戦うのは不可能。しかしそれを得るには代償が大きく現実的ではない」

レミーはほほ笑んでぺこりと頭を下げる。

「王家の血筋を受け入れるもよし、忘れるもよし。ルーク様は自分の御心のままに生きて良いと思いますよ。

ネネ様もそれを望んでいると思います」

「ん？ネネ？」

聞きなれた名前にジェルダは耳をピクリとさせる。興味なさそうに明後日の方を向いていたルークも視線だけ彼に向けた。

「ああ、すみません。亡くなられた女王陛下の愛称です。幼い時から私が面倒をみていたもので、つい」

「初めて耳にしました」

「そうでしょうね、王家は絶対の秘密主義でしたから。

しかしあなた方は知っても許されるでしょう。先の女王陛下のお名前はネーネルフィと仰られます。

亡くなられた時は、まだたったの１７歳の少女でございましたよ」

21話 ルークの帰還

ベットの中で浅く苦しそうな息を繰り返すネネは顔色も悪く痩せ細っている。もう熱が始めてから2週間も経っており、息を引き取るのも時間の問題だと思われた。

ヴィラたちが部屋に入ってきてても嫌がることなく、ただ視線だけを入口の方へ向ける。

「具合はどうだ？何か食べたいものは？」

母親のように優しく尋ねるヴィラに、ネネは何も言わずただ首を横に振った。そろそろと後に続いて入って来たアルフレットらもネネの様子を見ようと覗き込む。

「まったく、どうすりや良くなるんだ？」

ヴィラの言葉は直球だった。しかしこれが皆の本音。

彼女はどっかりとベットの傍の椅子に座り、足と手を組んでネネを上から見下ろした。

「病気でもない、魔術でも治らない。じゃあどうやったらいいんだ
よ」

「何かご存じありませんか？」

ルードリーフも優しく尋ねる。

彼らはもう万策尽き、ネネの為にしてあげられることはなにもない。ルーカス・ブラッドも相変わらず見つからず、ただ無意味に時間だけが過ぎていた。

最後の手段として、ネネ自身の知識に頼るしかない。

「なんでもいいんだ。思い当たることがあったら教えてくれ」

「皆ネネさんのことを心配してるんですよ？」

「お願いします」

「……」

ところがネネは無言を貫き通す。

黙って見ていたレオナードは痺れを切らし、剣を抜いて切先をネネの方へ向けた。ぎよっとするヴィラたち。

「ちよっ！レオナード！何やってんだよ！」

「話さないなら脅すまでだ」

「相手は病人だっつのー！」

「死にたくなければ知っていることをすべて話せ」

レオナードの剣は全く動かず迷いが無い。周りの人間たちはハラハラしながらも、ネネが話すことを祈って見守った。

ネネはゆっくりと切先に視線を向け、一度瞬きして口を開く。

「・・・殺すなら・・・どうぞ」

「死にたいのか？」

「構わない・・・」

ただ・・・、亡骸はノルディ地方の神殿に埋めて差しあげて・・・

「

レオナードは怪訝な顔をしてネネを見る。死を目前にしても、やはりネネの表情に変化はなかった。

「それから・・・ルーク様に伝えて・・・“ありがとうございます”・・・って」

「馬鹿！そんなの自分で伝えりゃいいだろうが！

元気になって会いに行けよ！いくらでも手伝ってやるから！」

感情的になって大きな声を出すヴィラ。ネネは視線を彼女に移し大きく息を吐くと、途切れ途切れになりながらも言葉を繋いだ。

「・・・いい・・・平気」

ヴィラはもう言葉が出てこずに黙り込む。

結局ネネは助かる気が全くなく、このまま1人で死んでいくことを望んでいる。本人はそれでいいのかもしれないが、ヴィラには納得できなかった。

アルフレットがヴィラの肩をぽんぽんと叩く。

「俺たちにできることは何もなさそうです。」

まあ、ネネさんを助けられるとしたら、本当にルーカス・ブラッドにしかできなさそうですね」

ルークの名前に少しだけ反応を見せるネネ。しかしすぐに布団を深く被って顔を隠してしまった。

ジェルダをベルガラに残して1人ドロージャに戻ったルーク。さっそく帰ったスラムで聞いたのは、ネネが王城に呼び出されたということだった。

すぐに首都に向かった彼は今、王城の目の前に居る。

高くそびえたつ城、城壁の周りには当然厳重な警備が敷かれていた。

「チツ、飛び越えるか」

「おいお前！何している！」

ルークを不振に思った兵士の1人が声をかけ、わらわらと餌に集る蟻のように増える兵士たち。しかしルークは綺麗さっぱり無視して助走をつけると、高さ10メートル以上ある壁を一気に登って向こう側へ飛び降りた。

その天晴な身体能力にぽかんと呆ける兵士たちを置いて、ルークは敷地内で周りを見渡す。塔はいくつもありさらに部屋の数も多い。

「まったく・・・広すぎてわかんねえな。
おい、そのてめえ」

急に上から降って来たルークに兵士の男は驚きで動けず、声をかけられてビクリと震えた。

「は、はい！」

「ネネの部屋はどこだ」

「はい！ネネ様の部屋ならあちらの3階に・・・！！ってもしかしてルーカス・ブラッド・・・！？」

「本物なのか！？」

「赤銅色の髪と深紅の目・・・間違いない」

大きな声を出されまた新たな兵士たちが集まる中、ルークはロープを靡かせながらネネの部屋へ向かう。もちろん正面から入るような

ことはしない。

壁を登り、バルコニーの手すりを利用しながらあつという間に3階まで辿り着いた。

それを眺める男達は追うこともせず、ただひたすら見守って祈る。

どうか、あの小さな魔女を助けてください・・・と。

ガシャーンと耳がキンキンするような破壊音を立てて窓ガラスが部屋中に飛び散る。急に破片が降り注いだ驚きと大きな音の衝撃で心臓をバクバクさせながら、ヴィラたちは侵入者を見て目を瞬いた。

燃えるような赤い瞳と大きな体躯、整いながらも野性味のある容姿。

ルークは部屋に集まっている面子を一通り見遣ると、不満そうな顔をして舌打ちする。

「この部屋は間違いか？」

「・・・いや・・・合つてると思うよ・・・。
つてかここ3階・・・あーあ、窓ガラスが粉々・・・」

「誰だてめえ」

ギロリとヴィラを睨むルークに前へ出て剣を向ける騎士2人。

「やめときな。」

せつかく見つけたのに殺すんじゃないよ」

「え！？もしかしてルーカス・ブラッド！？こいつが！？」

アルフレットは素っ頓狂な声を出してルークを凝視し、ルードリーフは神妙に頷いた。

「そのようですね」

「怖っ！つてかイメージ全然違っ！」

同じ空間に居るだけで、まるで肉食動物と同じ檻の中にいる気分になる。一瞬でも気を緩めれば殺されてしまいそうだ。

しかし一切物怖じしないレオナードは前へ出て堂々とルークを見据えた。周囲を圧倒する威厳たるやさすがは神に選ばれた者。

ルークも瞬時にただ者ではないと悟り、視線を合わせて身構える。

「ルーカス・ブラッドだな」

「俺を知ってるなら、ここに来た意味もわかってるんだろうな」

「お前の魔女ならばそこにいる」

ルークは途端にレオナードに興味を無くし、ベットの中で丸くなっている物体を見た。これだけの騒動があつたにも関わらず、ネネは全く出てこようとしなない。

「おい」

声をかけても返事はなく、ルークは乱暴に布団を引っ剥がす。もちろん中から出てきたのは蒼白な顔色をしてずいぶん痩せたネネの姿。叩き起こそうとしたが、ネネの異変に気がついたルークは視線を鋭くしてレオナードを睨んだ。

「……こいつに何をした」

ヴィラは一縷の望みをかけてルークに説明を始めた。

「何もしてない、だから困ってんだ。

医者に診せても病気じゃないって言うし、あたしの魔術も効果がな
いし、あたしらじゃお手上げ状態なんだよ。
あんた何か思い当たることはないか？」

「ねえな」

「……だよねえ」

ルークは靴も脱がずにベットに上がり、目を薄らと開けてぼーっとしているネネを自分の膝の上で横抱きにする。額に触ればかなり熱かった。

「熱か」

「症状は高熱だけだけど2週間前からずっと引かない。もう食べ物も喉を通らない状態でさ、このままじゃ助からないってのに、ネネはまるで元気になる気がないみたいで……。でもあんたが来てくれたんなら、少しはネネも治す気になるんじゃないかって思ってたんだ。会わせてあげたかったしね」

ヒールをコツコツと鳴らしながら、ヴィラはレオナードの隣まで来ると心配そうにネネを見た。

「申し訳ないが、あたしらにできることは何もないよ」

ルークは無言で腕の中にいるネネの身体をまじまじと調べる。首や手や足だけでなく服を豪快にめくり始めたため、アルフレットとシルヴィオとルドリーフの3人は真っ赤になってそっぽを向いた。

「おい、わかるか」

扱いも言葉もぞんざいなのにどこか優しい。ルークの問いかけにネネは視線だけ移して応える。

「ったく、俺がいない間に弱ってんじゃないねえ」

「……ルーク様……？」

「見りゃわかるだろが」

「どうして・・・ここに」

「ベルガラに行ってもつまんねえから帰って来たのに、待ってるはずのめえがいなかった。

何もせずに待つと約束したじゃねえか」

ルークが戦いに向かうときに交わした約束。もちろんネネは鮮明に覚えている。

「・・・ごめんなさい」

「悪いと思うならさっさと治せ。これじゃ連れて帰れねえだろ」

「ベルガラ王家の・・・復興は・・・いいんですか？」

「興味ねえ」

「わかり・・・ました、じゃあ・・・治します」

あまりにもあっさり頷いたものだからヴィラたちはズッコケそうになった。

22話 恋した人形

「とにかく理由を話せ」

「・・・えー・・・」

有無を言わさぬ口調で上から見下ろすルークに、横抱きにされているネネは渋っている様子。

「でないと俺がどうすりゃいいかわからないだろうが」

原因がわからなければ治しようもない。

ルークの言っていることは正しく、ネネはその場にいる全員の視線を浴びながら口を開いた。

「え・・・と、何を話せば・・・いいんですか？」

「何故熱が引かねえ、どうすれば治るんだ」

「場所、を・・・移動すれば・・・治ると、思います」

は？と間拔けな声が何重にも八モる。

身体が弱っている所為でネネは思うように話すことができず、ぽつりぽつりと自分のペースで続ける。

「ここは、世界の中心で・・・神の真下、です。私の・・・身体

が持ちません……。
もとは……ただのボロ人形、ですから」

「ちょっと待て、ネネ。ボロ人形ってどういうことだよ！
神の真下って、あんた一体……」

突拍子もない話にヴィラが問い詰める。

「……言葉通り……ただの作り物で……たぶん……人間じゃ、ない、と思う。
私を作った方、は……人形に魂を入れて、自分の血を注ぎ、私を作ったと……」

「魂を入れてってそんなことできるわけないだろ、魔術でだって無理なんだ」

「これを使っただら」

何の感情もなく古い本をロープから取り出したルークは、ぽいつとベツトの上に放り投げる。ネネはこくん、と頷いた。

「そう、それがベルガラ王家に……代々伝わる、悪魔契約書……と呼ばれるもの、です。」

自らの魂を差し代わりに……力を得ることができる……」

「悪魔？悪魔ってなんですか？」

聞いたこともない言葉にルードリーフが首を傾げる。意味はわからないけれども、なんとなく言葉の響きから邪悪であることは推測できた。

「悪魔は・・・、実態のないもの・・・この世界には存在しないもの・・・」

負の感情・衝動、・・・神の反対に位置する存在・・・」

「要するに悪いものってことだ」

ヴィラはおそろおそろ本に触れ、それを慎重に持ち上げる。

かなり年季が入って文字が消えかけている上に、見たこともない形で一切読むことができない。

「悪魔は、魂がない・・・。だから契約者の・・・魂をいただく・・・」

・・・そして、代わりに力を与える、これが契約」

「その本がベルガラ王家のものということは、お前はベルガラ王家の人間に作られたのだな」

レオナードの言葉はやけに冷たく響いた。その事実が本当ならばネネは最初から魔女ではなく、ドローシャの敵として位置するべき存在だったことになるのだから。

「・・・そう」

「ちょっと待て、また分からなくなってきた。

ネネはベルガラの人間ってことだ、魔女じゃなくて。じゃあ国の命令を無視することも、ルークについて行くこともできたと思うんだけど・・・」

「わざわざ死にに来なくてもよかったじゃねえのか？」

ヴィラとルークの問いにうんうんと頷くアルフレット。

ネネにとってこの場所が命取りならば、最初から来なければ何も困ったことは起こらなかった。

ネネは少し不安そうに眉を僅かにしかめる。

「・・・わからなかった・・・んです。何故女王陛下が、私を作ったのか・・・」

生まれたときには、ただ存在していた。契約者の血を与えられ、魂を入れられ、動く人形として生きていた。

しかし、目の前にあったのは血まみれの少女の死体。彼女は何も語ってくれることはない。

ずっと怖かった。自分が何のために存在しなければならないのか。

親もなく、保護者もなく、その答えを教えてくれる人はいない。

それでもネネはルークと出会い恋することで、自分で生きたい道を選ぶことができた。例え作り物であっても普通の人間と同じように恋をすることができた。

ところがルークがベルガラ王家の生き残りだと知ったことで、ネネはふとこう思った。

——もしかして自分はベルガラ王家を復興させるために作られたのではないか。もしそうだとしたら——

「・・・もしかしたら・・・ルーク様に恋したことは・・・仕組まれたことでは・・・ないのか、と」

もしも契約者は最初からルークと手を組ませる心積もりでネネを作ったのだとしたら。

恋を必然的に仕組んでいたとしたら。

そしたら、この恋は作り物——偽物になる。

「だから……思っただけです。」

ドロシーの、敵として生まれたなら……、ドロシーに従うことで否定できる。

ベルガラ、王家の為に生れたのなら……、自分の中に……流れる王家の血を捨てることで……証明できると……」

「もしかして自分が作られた理由を知りたかっただけ!？」

「……はい」

皆は絶句すると同時に大きく脱力した。

しかし、ネネにとっては自分の命よりも大切なこと。

「紛い物の自分でも……人を好きになれたこと、嬉しかった……。

だから……自分の心まで、偽物にされることが、嫌だったから……」

本物だと知りたかった、証明したかった。
ベルガラへ向かうルークを追わずにここで死ねば、それが立証される。

「・・・悪魔に、作られた私は・・・神と相容れない。予定通りだったの・・・」

思惑通りに身体は弱っていき、すべてが順調。

しかし途中でルークが来たことで、シナリオが大きく変わってしまった。

「うーん、じゃあ、ネネさんが途中で断念したのは？」

「ルーク様の命令だもん・・・」

当然とばかりにスラリと答えるネネ。ルークに逆らうという選択肢は最初からネネにはなかったため、彼に止めると言われれば止めざるを得ない。

そして結局は、証明できずに終わってしまう。

「お前の考えそんなことだが、死んだら意味ねえだろうが」

「・・・うつ」

ネネは下を向いて申し訳なさそうに呻いた。

「イジ・・・です・・・女の、意地」

「生れて来た理由なんざお前に限らず誰でもわかんねえよ。もし不服だったら俺が止めてやるから、とりあえずそのやり方は止めろ」

「・・・はい」

「それでもどうしても死にてえなら俺が殺してやるから言え」

「わかりました・・・」

不器用だが優しいルークとルークにだけは素直なネネにほんわかしてきた一同。最初見たときは意外な組み合わせだと思ったが、今は2人が恋人だというのも納得できる。

「じゃあとにかく、ネネを移動させようか」

話がひと段落したところで、ヴィラは手をパンツと叩き話題を移した。

今後の問題は山積みだが、まずはネネに元気になってもらわなくてはならない。

「移動つつつても、どれだけ離ればいいんすかね？」

「スラムに住んでいたなら国内でも問題ないでしょうね」

「あたしらには見当もつかないな。」

「・・・で、どれくらいかわかるのか？」

再び視線がネネに集中する。

「じゃあ・・・50メートルくらい・・・」

再びヴィラたちはズッコケそうになった。たった50メートル動かしただけでネネが元気になるなんて、今まで自分たちの苦労は一体な

んだっ
たのだ、
と。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8432t/>

ブラッディ・ドール

2012年1月7日13時46分発行